巡礼記

エゲリア
藤遥　制作

1〜3章　神の山シナイ

1:1 1聖書に記されているとおりに示されていました。こうして進んで行くうちに、わたしたちはある所に着きました。そこでは、わたしたちがその間を進んできた山々が開けて、果てしなく大きな谷をなしていました。谷はたいへん平らで、とても美しいところでした。谷の向こうには、神の聖なる山シナイが見えていました。山々が開けるこの場所は、欲心の墓のある所に接しています（民数記一一・三四）。1:2この場所に来たときのことです。わたしたちと一緒にいた、あの聖なる案内人たちが教えてくれました。「ここに来た人は、この場所から初めて神の山が見えるとき、ここで祈りをするのがならわしです」。それで、わたしたちもそのとおりにしました。この場所から神の山までは、さきに大きいと言ったあの谷を通って、全部で四マイルほどありました。

2:1この谷はとても大きく、神の山のすそに横たわっています。わたしたちが見て見積もることのできたかぎりでは、また案内人たちの言うところでも、長さはおよそ十六マイルあります。幅は四マイルあると、彼らは言っていました。山に入るためには、わたしたちはこの谷を横切らなければなりませんでした。2:2これが、その大きくてたいへん平らな谷です。聖なるモーセが主の山に登って、四十日四十夜そこにいた間、イスラエルの人々はこの谷にとどまっていました（出エジプト二四・一八）。また、これは子牛が造られた谷です（出エジプト三二章）。その場所は今日まで示されています。大きな石が、その場所に据えられて立っているからです。そして、この谷の奥にはあの場所があります。聖なるモーセが妻の父の羊の群れを飼っていたとき、神がまた、燃えるしばの中から彼にお語りになった場所です（出エジプト三・一）。2:3わたしたちの道筋は、まず、ここから見える神の山に登ることになっていました。わたしたちが来た側からのほうが、登りやすかったからです。それから、そこからもう一度あの谷の奥、つまりしばのあった所へ下ることになっていました。神の山は、そちらへ下るほうが下りやすかったからです。そこで、こう決まりました。望んでいたものをみな見てから、神の山を下って、しばのある所へ行く。そこから谷の真ん中を、その長さに沿ってずっと通り、神の人たちと一緒にもとの道に戻る。神の人たちは、聖書に書かれている場所を、谷を通りながら一つずつ示してくれました。そして、そのとおりになりました。2:4さて、わたしたちはパランから来て祈りをしたあの場所から進みました。道筋は、谷の奥を真ん中で横切って、それから向きを変えて神の山へ向かうというものでした。2:5この山は、まわりから見ると一つの山のように見えます。けれども、中に入ってみると、いくつもの山があります。しかし、全体が神の山と呼ばれています。とりわけその名で呼ばれる山は、それらすべての真ん中にあります。その頂には、書かれているとおり、神の栄光が下った場所があります。2:6まわりにあるこれらの山々はみな、これほど高い山はこれまで見たことがないと思うほどです。それでも、神の栄光が下ったあの真ん中の山は、それらすべてよりはるかに高いのです。わたしたちがその山に登ったときには、高いと見ていたあの山々がみな、すっかり足もとに見えました。まるでごく小さな丘のようでした。2:7これはたいへん驚くべきことで、神の恵みなしにはありえないことだと思います。真ん中の山、とりわけシナイと呼ばれる山、つまり主の栄光が下った山は、ほかのどの山よりも高いのです。それなのに、そのふもとまで来なければ、その山を見ることはできません。もっとも、それは登る前のことです。望みを果たしてそこから下りてくると、向かいからその山が見えます。登る前には、それができないのです。このことは、わたしたちが神の山に着く前から、兄弟たちが話してくれたので、わたしは知っていました。そこに着いてからは、本当にそうであることをはっきりと知りました。

3:1さて、わたしたちは土曜日の夕方に山に入りました。いくつかの修道の住まいに着くと、そこに住む修道士たちがたいへん親切に迎えてくれ、あらゆるもてなしをしてくれました。そこには教会もあり、長老もいるのです。わたしたちはその夜はそこに泊まりました。そして主の日の朝早く、その長老と、そこに住む

修道士たちと一緒に、山々を一つずつ登り始めました。これらの山は、たいへんな労苦をして登ります。わたしたちの言う「巻き貝のように」、ぐるりと回りながらゆっくり登るのではないからです。まるで壁を登るように、まっすぐに登ります。そして、とりわけシナイと呼ばれる真ん中の山のふもとに着くまでは、山を一つ登るごとに、まっすぐに下らなければなりません。3:2 こうして、わたしたちの神キリストのお導きで、わたしは登りました。一緒に来た聖なる人たちの祈りに助けられながら、たいへんな労苦をして登ったのです。歩いて登るほかなかったからです。鞍にまたがって登ることは、まったくできなかったのです。それでも、その労苦は感じませんでした。労苦を感じなかったのは、神のお導きで、抱いていた願いがかなうのを見ていたからです。そして第四時に、わたしたちは神の聖なる山シナイの頂に着きました。そこは律法が与えられた所、つまり山が煙った日に、主の栄光が下った場所です（出エジプト一九・一八）。3:3 その場所には今、大きくない教会があります。その場所そのもの、つまり山の頂が、それほど広くないからです。けれども、この教会そのものには大きな恵みがあります。3:4 神のお導きで頂まで登り切り、その教会の戸口に着きました。すると、その教会を受け持つ長老が、自分の修道の住まいからやって来て、わたしたちを迎えました。健やかな老人で、若いころからの修道士、ここで言う修行者でした。ほかに何を言いましょうか。この場所にいるのにふさわしい人でした。ほかの長老たちも迎えに来ました。また、その山の近くに住む修道士たちも、みな迎えに来ました。つまり、体の弱さや年齢に妨げられなかった人たちです。3:5 けれども、真ん中のその山の頂には、だれも住んでいません。そこには教会と、聖なるモーセがいたほら穴のほかには、何もないのです（出エジプト三三・二二）。3:6 モーセの書からその箇所をすべて読み、定めの順序でささげ物をささげました。こうして、わたしたちは聖餐にあずかりました。教会を出ようとすると、その場所の長老たちが祝福の品、つまりこの山に実る果物をくれました。聖なる山シナイは全体が岩で、灌木さえ生えていません。それでも、下のほう、山々のふもと近く、つまり真ん中の山のまわりにも、まわりの山々のまわりにも、わずかな土地があります。すると聖なる修道士たちは、熱心にすぐ小さな木を植えます。小さな果樹園と祈りの場所をつくり、そのそばに自分たちの修道の住まいを建てるのです。こうして、いわば山そのものの土から実を得るのですが、その実は自分の手で育てたものと見えるのです。3:7 こうして聖餐にあずかり、あの聖なる人たちが祝福の品をくれて、わたしたちは教会の戸口から外に出ました。そのとき、わたしは、場所を一つずつ見せてくれるよう、彼らに頼み始めました。すると聖なる人たちは、すぐに一つずつ見せてくださいました。あのほら穴を見せてくださったのです。聖なるモーセは、民が罪を犯したために初めの板を砕きました。その後、新しい板を受けるために再び神の山に登ったとき、モーセがいたほら穴です（出エジプト三三・一九、三四章）。ほかにも、わたしたちが望んだ場所や、彼ら自身がよく知っている場所を、見せてくださいました。3:8 尊い姉妹の皆さま、このことを知っていただきたいのです。わたしたちが立っていた場所は、教会の壁のまわり、つまりあの真ん中の山の頂でした。そこから見ると、初めにやっとの思いで登ったあの山々が、まるで小さな丘のように足もとに見えたのです。わたしたちの立つ真ん中の山と比べると、そう見えました。それでいて、あの山々は果てしなく大きく、これより高い山はかつて見たことがないと思えるほどでした。ただ、この真ん中の山がそれらをはるかにしのいでいたのです。そこからは、エジプト、パレスチナ、紅海が見えました。アレキサンドリヤへ通じるパルテニクムの海も、果てしなく広がるサラセン人の地も見えました。どれも、信じがたいほど下のほうに見えたのです。それらを一つずつ、あの聖なる人たちが指し示してくれました。

訳注

1 写本の初めの部分が失われ、文の途中から始まる。

4〜5章　ホレブと谷の聖所

4:1 こうして、登ろうと急いできた願いを、すべて果たしました。そこで、わたしたちは、登ってきた神の山の頂から下り始めました。下った先は、その山に続く別の山で、ホレブと呼ばれる所です。そこに教会があるからです。4:2 このホレブという所は、聖なる預言者エリヤが、アハブ王の前から逃げたときにいた所です。そこで神は彼に、『エリヤよ、あなたはここで何をしているのか』とお語りになりました（列王紀上一九・九）。列王紀に書いてあるとおりです。聖なるエリヤが身を隠したほら穴も、今日までそこに示されています。そこにある教会の戸口の前です。また、聖なるエリヤが神にささげ物をささげるために据えた石の祭壇も、そこに示されています。あの聖なる人たちが、一つずつ見せてくださったとおりです。4:3 そこで、ここでもささげ物をささげ、心をこめて熱心に祈りました。列王紀からその箇所も読まれました。どこへ行っても、そのたびにその場所の箇所を聖書から読んでもらうこと。それを、わたしはいつもとりわけ願っていたのです。4:4 こうしてここでもささげ物をささげてから、わたしたちはまた、そこから遠くない別の場所へ行きました。長老たちと修道士たちが案内してくれたのです。つまり、聖なるアロンが七十人の長老と一緒に立っていた場所です。聖なるモーセが、イスラエルの人々のために主から律法を受けていたときのことです（出エジプト二四・九〜一四）。その場所に屋根はありません。けれども大きな岩があって、まわりが丸く、上が平らになっています。アロンと長老たちは、その上に立っていたと言われます。真ん中には、石で造った祭壇のようなものもあります。そこでもモーセの書からその箇所が読まれ、その場所にふさわしい詩篇が一つ唱えられました。こうして祈りをしてから、わたしたちはそこを下りました。4:5 そうするうちに、もう第八時ごろになりました。前の日の夕方に入ったこの山々を抜け出るまで、まだ三マイル残っていました。けれども、さきに言ったとおり、入ってきたのと同じ側から出るのではありませんでした。聖なる場所をすべて歩いて巡り、そこにある修道の住まいもみな訪ねなければならなかったからです。そうして、さきに言ったあの谷の奥へ出ることになっていました。つまり、神の山のすそに横たわるこの谷です。4:6 その谷の奥へ出なければならないわけがありました。そこには聖なる人たちの修道の住まいがたくさんあり、しばのある場所に教会もあったのです。そのしばは今日まで生きていて、若枝を出しています。4:7 こうして神の山を下りきって、第十時ごろ、わたしたちはしばの所に着きました。これが、さきに言ったあのしばです。そのしばから、主は火の中でモーセにお語りになりました。そこは修道の住まいがたくさんある所で、谷の奥の教会もそこにあります。その教会の前には、たいへん美しい庭があります。良い水が豊かにわいていて、その庭の中にしばがあるのです。4:8 すぐそばには、聖なるモーセが立っていた場所も示されています。神が彼に『足からくつを脱ぎなさい』云々とお語りになったときの場所です（出エジプト三・五）。わたしたちがこの場所に着いたときには、もう第十時になっていました。もう夕方だったので、ささげ物をささげることはできませんでした。けれども、教会でも、庭のしばのそばでも祈りをしました。いつものとおり、モーセの書からその箇所も読まれました。こうして、もう夕方だったので、わたしたちは、あの聖なる人たちと一緒に、しばの前の庭で食事をとりました。そして、その夜はそこに泊まりました。次の日、わたしたちは早く起きて、長老たちに、ここでもささげ物をささげてくれるよう頼みました。そして、そのとおりにささげ物がささげられました。

5:1 わたしたちの道筋は、あの谷の真ん中を、その長さに沿って進むことになっていました。さきに言ったあの谷、つまり、モーセが神の山に登って下りてくるまで、イスラエルの人々がとどまっていた谷です。そこで、わたしたちがその谷の全体を通って行くあいだ、あの聖なる人たちは、場所を一つずつ、いつも指し示してくれました。5:2 まず、谷のいちばん奥は、わたしたちが泊まった所です。そこでは、神が火の中で聖なるモーセにお語りになった、あのしばを、すで

に見ていました。また、聖なるモーセがしばの前に立っていた場所も見ていました。神が彼に『足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである』とお語りになったときのことです（出エジプト三・五）。5:3 こうして、わたしたちがしばの所を出発すると、彼らはほかの場所を次々に見せてくれ始めました。モーセが山にいた日々に、イスラエルの人々の宿営があった場所も見せてくれました。あの子牛が造られた場所も見せてくれました。その場所には、今日まで大きな石が据えられて立っているのです。5:4 また、わたしたちは進みながら、向かいに一つの山の頂を見ていました。谷全体を見下ろす頂です。聖なるモーセはそこから、イスラエルの人々が踊っているのを見たのです。彼らが子牛を造ったときのことです。また彼らは、大きな岩を見せてくれました。聖なるモーセがヌンの子ヨシュアと一緒に下りてきた、その場所にある岩です。モーセは怒って、運んできた板をその岩に打ちつけて砕きました（出エジプト三二・一九）。5:5 また、イスラエルの人々がその谷のどこに、それぞれ住まいを構えていたかも見せてくれました。その住まいは、今日でもまだ土台が見えています。石でぐるりと囲んであったとおりの形です。また、聖なるモーセが山から戻って、イスラエルの人々に『門から門へ』行き巡るよう命じた場所も見せてくれました（出エジプト三二・二七）。5:6 また、アロンが彼らのために造ったあの子牛が、聖なるモーセの命令で焼かれた場所も見せてくれました（出エジプト三二・二〇）。また、聖なるモーセが、その水をイスラエルの人々に飲ませたあの流れも見せてくれました。出エジプト記に書いてあるとおりです（出エジプト一七・五）。5:7 また、七十人の人々がモーセの霊を分け与えられた場所も見せてくれました（民数記一一・二五）。また、イスラエルの人々が食べ物を求めて欲心を起こした場所も見せてくれました（民数記一一・四）。さらに、「焼けた所」と呼ばれる場所も見せてくれました。宿営の一部が焼けたので、そう呼ばれたのです。そのとき、聖なるモーセが祈ると、火はやみました（民数記一一・三）。5:8 また、彼らの上にマナとうずらが降った場所も見せてくれました（出エジプト一六・一三〜一四）。こうして、その場所で起きたとモーセの聖なる書に書かれていることは、みな一つずつ示されました。その場所とは、さきに神の山、つまり聖なるシナイのすそに横たわると言った、あの谷です。ただ、そのすべてを一つずつ書くのは手に余りました。それほど多くのことは、とても覚えきれなかったからです。けれども、皆さまがモーセの聖なる書をお読みになれば、そこで起きたことを、すべてもっとくわしくご覧になれるでしょう。5:9 これは、イスラエルの人々がエジプトの国を出て一年たったときに、過越の祭が行われた谷です。イスラエルの人々は、この谷にしばらくとどまっていたからです。つまり、聖なるモーセが神の山に登って下りてくるまでのあいだです。それも一度目と二度目の二回です。そしてまた、幕屋と、神の山で示されたものが一つ一つ造られるまで、長いあいだそこにとどまりました。モーセが初めて幕屋を張った場所も、わたしたちに示されました。神が山でモーセに造るようお命じになったものを、一つ一つ仕上げた場所です。5:10 また、谷のいちばん端で、欲心の墓も見ました。それは、わたしたちがもとの道に戻った場所にあります。つまり、あの大きな谷を出て、さきに言ったあの山々のあいだの、来たときの道にまた入った所です。またその日、わたしたちは、ほかのたいへん聖なる修道士たちのところも訪ねました。この人たちは、年齢や体の弱さから、ささげ物をささげるために神の山まで出て来ることが、できなかったのです。それでも、訪ねて行ったわたしたちを、自分たちの修道の住まいにたいへん親切に迎えてくださいました。5:11 こうして、わたしたちは願っていた聖なる場所をすべて見ました。イスラエルの人々が神の山へ行き来するときに通った場所も、みな見ました。そこに住む聖なる人たちにも会いました。そして神の名によって、パランに戻りました。5:12 わたしは、どんなことについても、いつも神に感謝しなければなりません。まして、ふさわしくなく値しもしないわたしに、神はこれほど大きなことをしてくださいました。わたしには値しない場所を、すべて巡らせてくださったのです。それは言うまでもありません。けれども、あの聖なる人たちみなにも、わたしは感謝しきれないのです。この取るに足りないわたしを、自分たちの修道の住まいに喜んで迎えてくださいました。また、わたしが聖書に従っていつも尋ね求めていた場所を、すべて案内してくださったのです。神の山の上や、そのまわりに住んでいた聖なる人たちのうち、たくさんの人が、パランまでわたしたちを送ってくださいました。もっとも、それは体の丈夫な人たちでした。

6〜9章　ゴセンの地を通ってエルサレムへ

6:1 こうして、わたしたちはパランに着きました。神の山から三十五マイルの所です。そこで、体を休めるために、二日とどまらなければなりませんでした。三日目に、わたしたちはそこを早く発ち、また宿駅に着きました。つまりパランの荒野です。さきに言ったとおり、行きにも泊まった所です。そこからまた次の日、水を汲み、もう少し山あいを進んで、宿駅に着きました。そこはもう海辺でした。つまり、山あいを出て、またずっと海沿いを歩き始める所です。ただ、海沿いといっても、波がふいに動物たちの足を打つこともあります。かと思えば、ふいに海から百歩、二百歩、ときには五百歩以上も離れて、荒野を歩くのです。そこには道というものがまったくなく、一面が砂の荒野なのです。6:2 パランの人々は、ラクダを連れてそこを行き来するのに慣れています。彼らは、ところどころに自分たちの目印を立てます。そして昼は、その目印を目ざして進みます。夜は、ラクダが目印を見分けます。ほかに何を言いましょうか。パランの人々は慣れているので、その場所を夜でも歩きます。しかも、ほかの人が道の開けた所を歩くよりも、注意深く確かに歩くのです。6:3 こうして帰り道、わたしたちは、行きに山あいへ入ったのと同じ所で、山あいを出ました。そしてまた海のほうへ向かいました。イスラエルの人々も、神の山シナイから引き返したとき、来た道を通ってこの所まで戻りました。つまり、わたしたちが山あいを出て、また紅海に出た所までです。そこからわたしたちは、来たときの自分たちの道を戻りました。一方、イスラエルの人々は、聖なるモーセの書に書いてあるとおり、その所から自分たちの道を進んで行きました（民数記一〇・一二、三三・三六）。6:4 わたしたちは、行きと同じ道を通り、同じ宿駅に泊まって、クレスマに戻りました。再びクレスマに着くと、そこでもまた体を休めなければなりませんでした。ひどく砂の多い荒野の道を通ってきたからです。

7:1 ゴセンの地は、わたしはすでに知っていました。初めてエジプトへ行ったときのことです。それでも、イスラエルの人々がラメセスを出てから紅海に着くまでに通った場所を、すべて見ておきたかったのです。紅海に着いたその場所は、今はそこにある砦の名からクレスマと呼ばれています。そこで、わたしたちはクレスマからゴセンの地へ向かうことを願いました。つまり、アラビヤという町へです。この町はゴセンの地にあります。その地方そのものも、この町の名で、アラビヤの地、ゴセンの地と呼ばれているのです（創世記四六・三四）[1]。この地はエジプトの一部ですが、エジプトのどこよりもはるかに良い所です。7:2 クレスマ、つまり紅海から、アラビヤの町までは、荒野を通って四宿駅あります。ただ、荒野とはいっても、宿駅ごとに詰め所があって、兵と隊長たちがいます。彼らが、砦から砦へと、いつもわたしたちを送ってくれました。この道のりでは、一緒にいた聖なる人たち、つまり聖職者たちと修道士たちが、場所を一つずつ示してくれました。わたしがいつも聖書に従って尋ね求めていた場所です。それらは道の左にも右にもあり、道から遠いものも近いものもありました。7:3 皆さまには、ぜひ信じていただきたいのです。わたしが見きわめることのできたかぎりでは、イスラエルの人々はこのように歩いたのです。右へ行った分だけ左へ戻り、前へ進んだ分だけ、また後ろへ戻りました。こうして紅海に着くまで、その道を進んだのです。7:4 ピハヒロテも示されました（出エジプト一四・二）。ただし向かいから見ただけです。ミグドルには行きました。そこには今、砦があり、隊長が兵とともにいて、ローマの秩序のために、今そこを治めています。わたしたちも、いつものとおり、そこから別の砦まで送ってもらいました。バアル・ゼポンの場所も示されました。いえ、その場所に行ったのです。そこは紅海のほとりの平地で、さきに言った山のわきにあります。イスラエルの人々が、エジプトびとがあとから来るのを見て、叫んだ所です（出エジプト一四・一〇）。7:5 エタムも示されました。書いてあるとおり、荒野の端にある所です（出エジプト一三・二〇）。スコテも示されました。スコテは、谷の真ん中にある低い丘です。その小さな丘のそばに、イスラエルの人々は宿営しました（出エジプト一二・三

七）。ここは、過越の祭の定めを受けた所です（出エジプト一二・四三）。7:6 イスラエルの人々が建てたピトムの町も、この道筋で示されました（出エジプト一・一一）。そこは、わたしたちがサラセン人の地をあとにして、エジプトの境に入った所です。そのピトムも、今は砦になっています。7:7 また、ヘロオンの町は、そのころは町でした。つまり、創世記に書いてあるとおり、やって来た父ヤコブをヨセフが迎えた所です（創世記四六・二九）2。その町が今は「コーメー」、つまりわたしたちの言う「村」になっています。ただし大きな村です。この村には教会があり、殉教者の記念堂と、聖なる修道士たちの修道の住まいもたくさんあります。わたしたちは、いつも守っていたならわしのとおり、それらを一つずつ見るために、そこに立ち寄らなければなりませんでした。7:8 この村は、今はヘロと呼ばれています。ヘロはゴセンの地から十六マイルの所にあり、エジプトの境の内にあります。その場所はとても心地よい所です。ナイル川の流れの一部が、そこを流れているからです。7:9 こうして、わたしたちはヘロを出て、アラビヤという町に着きました。ゴセンの地にある町です。ですから、パロがヨセフにこう言ったと書いてあるのです。『エジプトの地の最も良い所に、あなたの父と兄弟たちとを住ませなさい。ゴセンの地、アラビヤの地に』（創世記四七・六）。

8:1 アラビヤの町からラメセスまでは四マイルです。わたしたちは、アラビヤの宿駅へ行くために、ラメセスの真ん中を通りました。そのラメセスの町は、今は野原になっていて、家が一軒もありません。それでも、かつてはまわりがとても広く、建物がたくさんあったことは、はっきり分かります。崩れたままの廃墟が、今日でも果てしなく広がって見えるからです。8:2 今そこには、テーバイスの大きな石が一つあるほかは、何もありません。その石には、大きな像が二体彫り出されています。人々は、これは聖なる人たち、つまりモーセとアロンの像だと言います。イスラエルの人々が二人をたたえて建てたのだと言うのです。8:3 そこにはほかに、いちじく桑の木が一本あります。族長たちが植えたものだと言われています。もうたいへん古い木で、そのためにとても小さくなっていますが、それでも今なお実を結びます。体の具合の悪い人は、だれでもそこへ行って若枝を取ってきます。すると効き目があるのです。8:4 このことは、アラビヤの聖なる監督が話してくれたので知りました。監督は、この木のギリシア語の呼び名も教えてくれました。「デンドロス・アレーテイアス」、つまりわたしたちの言う「真理の木」です。この聖なる監督は、ラメセスまでわたしたちを迎えに来てくださいました。もう年配の人で、修道士の出の、本当に信仰の篤い、親しみやすい人です。旅人をとてもよくもてなし、神の聖書にもたいへん通じています。8:5 この監督は、わざわざ労をとって、そこまで迎えに来てくださいました。そして、さきに言ったあの像のことも、いちじく桑の木のことも、一つずつ示し、話してくれました。聖なる監督は、こんなことも話してくれました。パロは、イスラエルの人々が自分のもとを去ったのを見ました。そこで、その後を追う前に、全軍を率いてラメセスに入り、町をすっかり焼き払ったそうです。町がとても大きかったからです。それから、イスラエルの人々の後を追って出て行ったというのです。

9:1 わたしたちには、たまたま、とてもうれしいことがありました。アラビヤの宿駅に着いた日が、ちょうど幸いな公現祭の前日だったのです。その日には、教会で徹夜の祈りが行われることになっていました。そこで聖なる監督は、わたしたちを二日ほどそこに引きとめました。聖なる、本当に神の人で、わたしがテーバイスに行ったときから、もうよく知っている人です。9:2 この聖なる監督は修道士の出です。幼いころから修道の住まいで育てられました。ですから、さきに言ったとおり、聖書によく通じているうえに、暮らしのすべてにおいて非の打ちどころがないのです。9:3 わたしたちは、そこで兵たちを帰しました。危ない土地を歩いているあいだ、ローマの秩序のために助けてくれた兵たちです。今は、エジプトを通る公道が、アラビヤの町を通っていました。つまり、テーバイスからペルシウムへ通じる道です。それで、もう兵たちを煩わせる必要はなかったのです。9:4 こうして、そこを出発すると、わたしたちはゴセンの地を通るあいだ、ずっとぶどう畑のあいだを進みました。ぶどう酒のとれるぶどう畑もあれば、バルサムのとれる畑もありました。果樹園や、よく耕された畑や、とても美しい庭のあいだも通りました。ナイル川の岸の上をずっと進み、とても多くの農地のあいだを通りました。かつてイスラエルの人々の屋敷があった所です。ほかに何を言いましょうか。ゴセンの地より美しい土地は、どこでも見たことがない

と思います。9:5 こうして、アラビヤの町から二日のあいだ、ずっとゴセンの地を通って旅をし、ゾアンに着きました。聖なるモーセが生まれた町です。このゾアンの町は、かつてパロの都でした（民数記一三・二二）。9:6 さきに言ったとおり、わたしはこれらの場所を、すでに知っていました。アレキサンドリヤとテーバイスに行ったときのことです。けれども、イスラエルの人々がラメセスから神の聖なる山シナイまで進んだ場所を、十分に知りたいと思ったのです。それで、もう一度ゴセンの地へ戻り、そこからゾアンへ行かなければなりませんでした。こうしてわたしたちはゾアンを出発しました。わたしは、すでに知っている道を通って、ペルシゥムに着きました。9:7 そこからまた出発し、わたしたちが来たときに通ったエジプトの宿駅を一つずつたどって、パレスチナの境に着きました。そこからまた、わたしたちの神キリストの名によって、パレスチナの宿駅をいくつか重ねました。そして、アエリア、つまりエルサレムに帰りました。

訳注

1 ゴセンをアラビヤの地と呼ぶのは、旧約のギリシア語訳による。

2 町の名は旧約のギリシア語訳による。日本語の聖書ではゴセン。

10〜12章　ネボ山

10:1 それからしばらくたって、神のお導きで、わたしはまたアラビヤまで行きたいと思うようになりました。つまりネボ山です。そこは、神がモーセに登るようお命じになった所です。神はモーセにこう仰せになりました。『エリコに対するモアブの地にあるアバリム山すなわちネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に与えて獲させるカナンの地を見渡たせ。あなたは登って行くその山で死ぬであろう』（申命記三二・四九〜五〇）。10:2 わたしたちの神イエスは、ご自分に望みを置く者をお見捨てにならない方です。こうして、このことでも、わたしの願いをかなえてくださいました。10:3 そこで、わたしはエルサレムを出発し、聖なる人たちと一緒に旅をしました。つまり、エルサレムの長老一人と執事たち、それに何人かの兄弟たち、つまり修道士たちです。こうしてわたしたちは、ヨルダン川の、イスラエルの人々が渡った所に着きました。ヌンの子である聖なるヨシュアが、彼らにヨルダンを渡らせたときのことです。ヨシュア記に書いてあるとおりです。また、ルベンの子孫とガドの子孫とマナセの部族の半ばが祭壇を築いた場所も、わたしたちに示されました。少し高くなった所で、エリコのある側の岸にあります。10:4 そこで川を渡り、リビアダという町に着きました。この町は、そのころイスラエルの人々が宿営を張った平野にあります。その場所には、イスラエルの人々の宿営と、彼らがとどまっていたときの住まいの土台が、今も見えています。この平野は、アラビヤの山々のふもとに、ヨルダンに臨んで果てしなく広がっているのです。ここは、聖書にこう書いてある場所です。『イスラエルの人々はモアブの平野、ヨルダンのほとり、エリコに対する所で、四十日の間モーセのために泣いた』（申命記三四・八）[1]。10:5 ここはまた、モーセが去った後、ヌンの子ヨシュアがすぐに知恵の霊に満たされた場所です。モーセが彼の上に手を置いたからです。書いてあるとおりです。10:6 それに、ここはモーセが申命記を書いた場所です。また、モーセがイスラエルの全会衆に、歌の言葉を終わりまで語り聞かせた場所でもあります（申命記三二章）。その歌は申命記に書かれています。ここはまた、神の人である聖なるモーセが、死ぬ前に、イスラエルの人々をそれぞれ順に祝福した場所です（申命記三三章）。10:7 わたしたちはその平野に来ると、その場所まで行きました。そこで祈りをし、申命記の一部が読まれました。その歌と、モーセがイスラエルの人々に述べた祝福も読まれました。朗読の後、また祈りをしました。そして神に感謝して、そこを発ちました。わたしたちには、いつもこうするならわしがあったのです。行きたいと願っていた場所に行けたときには、どこでも、まずそこで祈りをします。次に、書物からその箇所を読んでもらいます。そのことにふさわしい詩篇も一つ唱えられます。そしてまた、そこで祈りをするのです。行きたいと願っていた場所に着けたときには、神のお導きで、どこでもいつもこのならわしを守りました。10:8 こうして、始めた務めをやり遂げるために、わたしたちはネボ山へ急ぎました。その道々、その土地の長老、つまりリビアダの長老が、わたしたちに教えてくれました。この長老には、その土地をよく知っているので、頼んで宿駅から一緒に来てもらっていたのです。その長老がこう言いました。「岩から流れ出る水、つまりモーセが渇いたイスラエルの人々に与えた水を見たいなら、見に行けます（出エジプト一七・六、民数記二〇・八）。ただし、道からそれて六マイルほど行く労をいとわなければ、ですが」10:9 長老がそう言うと、わたしたちはぜひ行きたいと思いました。そしてすぐに道をそれ、案内してくれる長老について行きました。その場所には小さな教会があります。ネボ山ではなく、もっと奥にある別の山のふもとです。ただ、その山もネボからそう遠くはありません。そこには本当に聖なる修道士たちが大勢住んでいます。ここで言う修行者たちです。

11:1 この聖なる修道士たちは、わたしたちをとても親切に迎えてくださいました。あいさつのために、自分たちのところへ入ることも許してくれました。中に入ると、一緒に祈りをしました。それから修道士たちは祝福の品をくださいました。親切に迎えた人々に、いつもそうして与えるならわしなのです。11:2 そこに

は、教会と修道の住まいのあいだの真ん中に、岩から水がたくさん流れ出ています。とても美しく澄んでいて、味もたいへん良い水です。そこでわたしたちは、そこに住む聖なる修道士たちに、これほど味の良いこの水は何なのかと尋ねました。すると修道士たちは言いました。「これは、聖なるモーセがこの荒野でイスラエルの人々に与えた水です」 11:3 それから、ならわしのとおり、そこで祈りをし、モーセの書からその箇所が読まれました。詩篇も一つ唱えられました。そうしてわたしたちは、一緒に来ていた聖なる聖職者たちや修道士たちとともに、山へ向かいました。その水のそばに住む聖なる修道士たちのうちからも、大勢がネボ山に一緒に登ってくださいました。登る労に耐えられる人たちです。 11:4 こうして、その場所を出発し、ネボ山のふもとに着きました。山はとても高いものでした。それでも大部分は、ろばに乗って登ることができました。ただ少しだけ険しい所があり、そこは歩いて苦労して登らなければなりませんでした。実際、そのとおりにしました。

12:1 こうして、わたしたちはその山の頂に着きました。今は、ネボ山の頂そのものに、大きくはない教会があります。この教会の中の、壇のある所に、わたしは少し高くなった場所を見ました。墓がふつう占めるくらいの広さです。 12:2 そこでわたしは、あの聖なる人たちに、これは何かと尋ねました。すると、こう答えました。「ここに聖なるモーセが、天使たちによって葬られたのです。書いてあるとおり、『その葬りを知る人はない』からです（申命記三四・六）。天使たちによって葬られたことは確かなのです。そして、モーセの墓、つまり葬られた場所は、今も示されています[2]。ここに住んでいたわたしたちの先人たちが、わたしたちに、どこに葬られたかを示してくれました。そのとおりに、わたしたちもあなたがたに示しているのです。その先人たちも、自分たちの先人からそう伝えられたと言っていました」 12:3 そこで、すぐに祈りをしました。聖なる場所ごとに順を追ってしていたことは、みなここでも行いました。そうして、わたしたちは教会を出ようとしました。すると、この土地をよく知る人たち、つまり長老たちと聖なる修道士たちが、わたしたちに言いました。「モーセの書に書かれている場所を見たいなら、教会の戸口の外に出てください。そして頂そのものから、ここから見える限りの方角を、よく見てください。見えている場所が何か、一つずつお話ししましょう」 12:4 わたしたちはとても喜び、すぐに外へ出ました。教会の戸口から、ヨルダン川が死海に注ぐ所が見えました。わたしたちが立っている所の真下に、その場所が見えたのです。向こうには、ヨルダンのこちら側にあったリビアダばかりか、向こう側のエリコも見えました。わたしたちが立っていた高い所、つまり教会の戸口の前は、それほど高くそびえていたのです。 12:5 また、パレスチナの大部分、つまり約束の地もそこから見えました。目の届く限りではありますが、ヨルダンの地もすべて見えました。左手には、ソドムの人々の地がすべて見えました。ゾアルも見えました。このゾアルだけは、あの五つの町のうちで今も残っています（創世記一四・二、申命記三四・三）。 12:6 ゾアルには記念の場所もあります。ほかの町々は、灰にされたときのままの、崩れた廃墟のほかには何も見えません。ロトの妻の碑があった場所も示されました。この場所は聖書にも記されています（創世記一九・二六）。 12:7 けれども、尊い皆さま、どうか信じてください。あの柱そのものは、もう見えないのです。場所そのものが示されるだけです。柱そのものは、死海に覆われてしまったそうです。確かに、その場所を見たとき、柱はどこにも見えませんでした。ですから、このことで皆さまを欺くことはできません。その土地の監督、つまりゾアルの監督が話してくれました。あの柱が見えなくなって、もう何年かになるそうです。柱が立っていた場所は、ゾアルから六マイルほどの所にあります。今はそこがすっかり水に覆われているのです。 12:8 また、教会の右手の、外の方へ行くと、向こうに二つの町が示されました。一つはヘシボンです。アモリびとの王シホンの町で、今はエクセボンと呼ばれています（民数記二一・二六、申命記二九・七）。もう一つは、バシャンの王オグの町で、今はサスドラと呼ばれています（民数記二一・三三、申命記三・一〇）。同じ場所から、向こうにペオルも示されました。エドムの国の町だった所です（民数記二三・二八、申命記四・四六）。 12:9 わたしたちが見たこれらの町は、どれも山の上にありました。その下の少し低い所に、平らな土地が見えました。そのとき、こう聞かされました。聖なるモーセとイスラエルの人々があの町々と戦ったころ、そこに宿営を張っていたというのです。実際、宿営の跡がそこに見えていました。 12:10 また、さきに左手と言った山の側、つまり死海の上の側には、ひどく切り立った山が示されました。かつて

「野の見張り場」と呼ばれた山です（民数記二三・一四）。ここは、ベオルの子バラクが、イスラエルの人々をのろわせるために、占い師バラムを立たせた山です。けれども、書いてあるとおり、神はそうすることをお許しになりませんでした。12:11 こうして、願っていたものをすべて見たので、神の名によって帰途につきました。エリコを通り、来た道をそのままたどって、エルサレムに帰りました。

訳注

1 日本語の聖書では三十日。

2 写本では『今も示されていない』と否定になっている。

13〜16章　ヨブの地

13:1 それからしばらくして、わたしはウヅの地へも行きたいと思いました（ヨブ記一・一）。聖なるヨブの墓を訪ねて、祈りをするためです。聖なる修道士たちが大勢、そこからエルサレムへ来るのを、わたしは見ていました。この人たちも、聖なる場所を訪ねて祈りをするために来たのです。その人たちは、その土地のことを一つずつ話してくれました。それで、わたしは労をいとわずその場所まで行きたいと、ますます願うようになったのです。もっとも、人が自分の願いのかなうのを目にするところで、それを労と呼べるならの話ですが。13:2 そこでわたしは、聖なる人たちと一緒にエルサレムを出発しました。この人たちは、わたしの旅に付き添ってくださったのです。もっとも、この人たち自身も祈りをするために行ったのですが。エルサレムからカルネアスまでは、宿駅を八つたどる道のりでした。カルネアスは、今はヨブの町と呼ばれています。以前はデナバと呼ばれた町で（創世記三六・三二）[1]、ウヅの地の、エドムとアラビヤの境にあります。この道を行く途中、わたしはヨルダン川の岸に、とても美しく快い谷を見ました。ぶどう畑と木々が豊かに茂っていました。そこには水がたっぷりあり、しかもとても良い水だったからです。13:3 その谷には大きな村があり、今はセディマと呼ばれています。この村は平地の真ん中にあり、村の真ん中に小さな丘があります。それほど大きくはありませんが、墓のような形をしています。ただし大きな墓です。その頂には教会があり、下の方には、丘のまわりに古い大きな土台が見えています。今、この村には、かなり多くの人々が住んでいます。13:4 これほど心地よい場所を見て、わたしは、この美しい所はいったいどこなのかと尋ねました。すると、こう教えられました。「ここはメルキゼデク王の町です。以前はサレムと呼ばれていました。そこから、今は言葉がなまって、この村はセディマと呼ばれているのです。村の真ん中にあるこの小さな丘の頂に、あなたが見ている建物は教会です。この教会は、今はギリシア語で『オプ・メルキゼデク』と呼ばれています[2]。ここは、メルキゼデクが神に清いささげ物、つまりパンとぶどう酒をささげた場所なのです（創世記一四・一八）。聖書に、メルキゼデクがそうしたと書いてあるとおりです」

14:1 これを聞くとすぐ、わたしたちは乗っていた動物から降りました。するとそこへ、その土地の聖なる長老と聖職者たちが迎えに出てきてくださいました。この人たちはすぐにわたしたちを迎え入れ、上の教会へ連れて行ってくれました。教会に着くと、すぐにならわしのとおり、まず祈りをしました。次に、聖なるモーセの書からその箇所が読まれました。その場所にふさわしい詩篇も一つ唱えられました。そしてまた祈りをしてから、丘を降りました。14:2 丘を降りると、あの聖なる長老がわたしたちに話してくれました。もう年配で、聖書によく通じた人です。つまり、修道士の出で、この場所を治めていた人です。後で知ったところでは、多くの監督たちも、この長老の暮らしぶりを大いにほめていました。監督たちは、この人こそこの場所を治めるにふさわしい、と言っていたのです。この場所とは、聖なるメルキゼデクが、やって来た聖なるアブラハムを迎えて、初めて神に清いささげ物をささげた所です。さて、さきに言ったとおり、教会から下へ降りると、その聖なる長老はこう言いました。「ご覧なさい。この丘のまわりにある、あなたがたの見ているこの土台は、メルキゼデク王の宮殿の跡です。今でも、だれかがふとこのそばに家を建てようとして、土台に行き当たることがあります。すると、ときどき銀や青銅の小さなかけらが見つかるのです。14:3 また、ご覧なさい。ヨルダン川とこの村のあいだを通る道が見えるでしょう。この道は、聖なるアブラハムが、諸国の王ケダラオメルを撃ち破って、ソドムへ帰って来た道です（創世記一四・一）。この道で、サレムの王である聖なるメルキゼデクが、アブラハムを迎えたのです」

15:1 聖なるヨハネがサリムに近いアイノンで洗礼を授けていたと、聖書に書いてあります（ヨハネ三・二三）。わたしはそれを覚えていたので、その場所はどのくらい離れているのかと尋ねました。すると、その聖なる長老は言いました。

「ほら、二百歩ほどの所にあります。お望みなら、今すぐ歩いてあなたがたをご案内しましょう。この村で見えている、これほど豊かで澄んだ水も、その泉から来ているのです」15:2そこでわたしは長老に礼を言い、その場所へ案内してくれるよう頼みました。そして、そのとおりになりました。わたしたちはすぐに長老と一緒に歩き出し、とても美しい谷をずっと進みました。やがて、たいへん美しい果樹園に着きました。長老はその真ん中に、とても良い、澄んだ水の泉を示してくれました。この泉は、たちまち一筋の川をまるごと流し出していました。泉の前には池のようなものがあって、聖なるバプテスマのヨハネがそこで務めを果たしたことがうかがえました。15:3そのとき、聖なる長老はわたしたちに言いました。「今でもこの園は、ギリシア語で『ケーポス・トゥー・ハギウー・ヨーアンヌー』としか呼ばれていません。あなたがたがラテン語で言う『聖なるヨハネの園』です。大勢の兄弟たち、聖なる修道士たちも、あちこちからこの場所へ、身を洗いに来るのです」15:4そこで、ほかの場所ごとにしてきたのと同じように、この泉のそばでも祈りをし、その箇所が読まれました。ふさわしい詩篇も唱えられました。聖なる場所に来るたびにいつも行うならわしを、ここでも一つずつ行ったのです。15:5聖なる長老は、こんなことも話してくれました。今日まで毎年の復活祭には、この村で洗礼を受ける人は、みなこの泉で洗礼を受けるそうです。この村で、というのは、「オプス・メルキゼデク」と呼ばれる教会で、ということです。そして朝早く、ともしびをともして、聖職者たちや修道士たちと一緒に、詩篇と交唱を唱えながら戻るのだそうです。こうして、洗礼を受けた人はみな、朝早く、泉から聖なるメルキゼデクの教会まで導かれて行くというのです。15:6わたしたちは長老から祝福の品、つまり聖なるバプテスマのヨハネの果樹園の果物をいただきました。その果樹園の中に修道の住まいを持っていた聖なる修道士たちからも、同じようにいただきました。そして、いつものように神に感謝しながら、行く先へと旅を続けました。

16:1こうして、わたしたちはしばらくヨルダンの谷を、川の岸に沿って進みました。しばらくはそこが道だったからです。すると不意に、聖なる預言者エリヤの町、つまりテシベが見えました。テシベびとエリヤという名は、この町から来ています（列王紀上一七・一）。そこには今も、この聖なる人が住んだほら穴があります。また、聖なるゲタの墓もあります。士師記にその名が出てくる人です（士師記一二・七）[3]。16:2こうして、ここでもならわしのとおり神に感謝して、旅を続けました。さらにその道を進むと、左手から一つの谷が下りて来ているのが見えました。とても美しい谷です。大きな谷で、ひどく大きな流れをヨルダンに注いでいました。その谷の中に、ある兄弟、つまり修道士が今住んでいる修道の住まいが見えました。16:3わたしはとても好奇心が強いものですから、聖なる修道士が今そこに修道の住まいを構えたこの谷は何なのかと、尋ね始めました。修道士がわけもなくそこに住まいを構えたのではない、と思ったからです。すると、一緒に旅をしていた聖なる人たち、つまりこの土地をよく知る人たちが、わたしたちに言いました。「ここはケリテの谷です。アハブ王の時代、ききんがあったときに、テシベびとである聖なるエリヤが住んだ所です。神のご命令で、からすがエリヤに食べ物を運び、エリヤはこの流れの水を飲みました（列王紀上一七・三〜六）。谷から下ってヨルダンへ流れ込んでいる、あなたが見ているこの流れが、ケリテです」16:4こうして、わたしたちはここでも神に感謝しました。神は、ふさわしくないわたしたちにも、願っていたものを一つずつ示してくださるのです。そして毎日そうしていたように、旅を続けました。こうして毎日旅をしていくと、不意に左手に、とても大きく、果てしなく高い山が現れました。その左手の方角の向こうには、ピニケの地方が見えていました。山は長く延びていて16:5[4]「その聖なる修道士は修行者で、何年も荒野に住んでいました。けれども、そこを出て、カルネアスの町へ下りて行かなければならなくなりました。啓示を受けたとおりに、そのころの監督と聖職者たちに勧めるためです。自分に示された場所を掘るように、ということでした。そして、そのとおりになりました。16:6その人たちが示された場所を掘ると、ほら穴が見つかりました。それをたどって百歩ほど進むと、掘っているところへ不意に石が現れました。その石をすっかり掘り出すと、そのふたに、ヨブその人の名が刻まれているのが見つかりました。そこで、そのとき、このヨブのために、その場所に、あなたがたが見ているこの教会が建てられたのです。ただし、石は遺体と一緒にほかの所へ移さず、遺体が見つかったその場所に据えて、遺体が祭壇の下に横たわるようにしました。ところが、この教会は、だれだったか、ある将校が建てていたものです

が、今日まで未完成のままなのです」16:7 こうして、わたしたちは次の日の朝、監督に、ささげ物をささげてくれるよう頼みました。監督はそのとおりにしてくださいました。そして監督に祝福されて、わたしたちは出発しました。こうしてここでも聖餐にあずかり、いつものように神に感謝しながら、エルサレムへ帰りました。三年前に通った宿駅を、一つずつたどる道でした。

訳注

1 デナバをヨブの町とするのは、旧約のギリシア語訳の付記による。
2 この名は写本で崩れていて、意味が定まらない。
3 士師記のエフタを指すとみられる。
4 ここで写本の一葉が失われている。

17〜19章　エデッサ

17:1 それから、しばらく時がたちました。わたしがエルサレムに来てから、もう満三年になっていました。祈りのために目指してきた聖なる場所も、すべて見終えていました。それで、もう故郷へ帰ろうと思っていました。けれども神の名によって、また神のお導きで、スリヤのメソポタミヤへも行きたいと思いました。そこの聖なる修道士たちを訪ねるためです。その地には修道士が大勢いて、言い表せないほどすぐれた暮らしをしていると言われていました。また、聖なる使徒トマスの記念堂で祈りをするためでもありました。そこにはトマスの遺体が、損なわれないまま納められています。その場所はエデッサです。わたしたちの神イエスは、天にお昇りになった後にトマスをそこへ送ると、手紙で約束なさいました。急使アナニヤに託してアブガル王にお送りになった手紙です。この手紙は、記念堂のあるエデッサの町で、たいへんうやうやしく保管されています。17:2 愛する皆さまには、どうか信じていただきたいのです。キリスト者のうち、祈りのためにそこへ行かない人は一人もいません。少なくとも、聖なる場所、つまりエルサレムまで来た人ならそうです。この場所は、エルサレムから二十五番目の宿駅の所にあります。17:3 メソポタミヤへは、アンテオケからのほうが近いのです。わたしはコンスタンティノポリスへ帰るところで、その道はアンテオケを通っていました。それで、そこからメソポタミヤへ行くのが、神のお導きで、たいへん都合がよかったのです。そして神のお導きで、そのとおりになりました。

18:1 こうして、わたしはわたしたちの神キリストの名によって、アンテオケからメソポタミヤへ向けて出発しました。道は、コイレ・スリヤ州の宿駅と町をいくつか通りました。アンテオケのある州です。そこからアウグストフラテンシス州の境に入り、ヒエラポリスの町に着きました。この州、つまりアウグストフラテンシス州の州都です。この町はとても美しく豊かで、何でもふんだんにあります。それに、そこからはもうメソポタミヤの境が遠くありませんでした。それで、わたしはそこにとどまらなければなりませんでした。18:2 そこでヒエラポリスを出発し、神の名によって、十五マイル目でユフラテ川に着きました。この川のことを『大川ユフラテ』と書いてあるのは（創世記一五・一八）、まことにもっともです。実に広大で、恐ろしいほどの川です。その流れはローヌ川のように激しい勢いをもっていますが、ユフラテのほうがさらに大きいのです。18:3 この川は船で、それも大きな船でなければ渡れませんでした。それで、わたしはそこで半日あまり足止めされました。それから神の名によってユフラテ川を渡り、スリヤのメソポタミヤの境に入りました。

19:1 そこからまた宿駅をいくつか重ねて、ある町に着きました。その名が聖書に記されているのを、わたしたちが読んでいる町で、バタニスといいます。この町は今日まで続いています。そこには教会があり、本当に聖なる監督がいます。監督は修道士で、告白者でもあります。殉教者の記念堂もいくつかあります。町は人が多くにぎやかで、兵がその将校と一緒に駐屯しています。19:2 そこからまた出発して、わたしたちの神キリストの名によってエデッサに着きました。着くとすぐに、教会と聖なるトマスの記念堂へ行きました。そして、ならわしのとおり祈りをし、聖なる場所でいつもするほかのことも行いました。さらに、わたしたちは聖なるトマスにまつわるものもいくらか、そこで読みました。19:3 そこにある教会は大きく、とても美しく、新しいつくりで、まことに神の家にふさわしいものです。そこには見たいものがたくさんあったので、わたしは三日間とどまらなければなりませんでした。19:4 こうして、わたしはこの町で、殉教者の記念堂をたくさん見ました。聖なる修道士たちにも会いました。記念堂のそばに住む人もいれば、町から遠く離れた人目につかない所に修道の住まいを持つ人もいました。19:5 この町の聖なる監督は、本当に信仰深い人で、修道士で告白者でもありました。監督はわたしを喜んで迎え入れて、こう言いました。「娘よ、あなたは信仰のために、これほどの労をいとわず、遠い地の果てからこの土地まで来た

のですね。ですから、お望みなら、キリスト者がここで見て喜ぶ所を、どこでもお見せしましょう」そこでわたしは、まず神に感謝しました。それから監督に、申し出のとおりにしてくださるよう、くれぐれも頼みました。19:6 そこで監督は、まずわたしをアブガル王の宮殿へ連れて行き、王の大理石の像を見せてくれました。人々の言うところでは、王にたいへんよく似ているそうです。真珠でできているかのような輝きでした。そのアブガルの顔を正面から見ると、この人が本当にたいへん賢く、尊ばれる人だったことがうかがえました。そのとき、聖なる監督はわたしに言いました。「ご覧なさい、アブガル王です。王は主を見る前に、主が本当に神の子であると信じたのです」そのそばには、同じような大理石でできた像がもう一つありました。監督によれば、王の子マグヌスの像だそうです。この像もまた、顔にどこか気品がありました。19:7 それから、宮殿の奥へ入りました。そこには魚でいっぱいの泉がありました。これほどの魚は、それまで見たことがありませんでした。つまり、これほど大きく、これほどつややかに光り、これほど味のよい魚です。この町には今、宮殿から流れ出るこの水のほかに、水はまったくありません。その水は、銀色の大きな川のようです。19:8 そのとき、聖なる監督はこの水について、こう話してくれました。「昔のことです。アブガル王が主に手紙を書き、主も急使アナニヤに託して、アブガルに返事をお書きになりました。その手紙に書いてあるとおりです。さて、しばらくして、ペルシャ人が攻めて来て、この町を囲みました。19:9 けれどもアブガル王はすぐに主の手紙を持ち、全軍と一緒に門へ行って、人々の前で祈りました。そしてこう言いました。『主イエスよ、あなたはわたしたちに、敵がだれもこの町に入らないようにすると約束してくださいました。それなのに、ご覧ください、ペルシャ人が今わたしたちを攻めています』王はこう言って、開いた手紙を両手で高く掲げました。すると、たちまち深い暗闇が起こりました。ただし町の外、ペルシャ人の目の前にだけです。ペルシャ人はもう町に迫り、町から三マイルの所まで来ていました。ところが、たちまち暗闇にまどわされて、陣を張り、三マイルの所で町をぐるりと囲むのがやっとでした。19:10 ペルシャ人はひどくまどわされて、その後、町のどこから入ればよいのか、まったく分かりませんでした。ただ、町を敵の兵でぐるりと閉じ込めたまま、三マイル離れた所から見張るだけでした。それでも、何か月も見張り続けたのです。19:11 その後、どうやっても町に入れないと分かると、ペルシャ人は町の中の人々を渇きで殺そうとしました。娘よ、あなたが見ている、町の上のあの小山が、そのころこの町に水を送っていたのです。これを見たペルシャ人は、その水を町からそらし、自分たちが陣を張っていた場所の方へ流れを向けました。19:12 ペルシャ人が水をそらした、ちょうどその日、その時のことです。あなたがこの場所で見ているこの泉が、神のご命令でたちまちわき出たのです。その日から今日まで、この泉は神の恵みによって、ここにわき続けています。一方、ペルシャ人がそらしたあの水は、その時たちまち干上がりました。町を囲んでいた者たち自身でさえ、一日も飲む水がなかったほどです。今日でもそれは見て分かります。その後、そこには少しの湿り気さえ、今日まで現れたことがないのです。19:13 神は、このことが起こると約束しておられました。こうしてそのお導きで、ペルシャ人はすぐに自分の国、つまりペルシャへ引き揚げなければなりませんでした。その後も、敵がこの町を攻め取ろうとして来るたびに、この手紙が持ち出されて、門で読まれました。すると、神のみこころによって、敵はみなすぐに追い払われたのです」19:14 聖なる監督は、こんなことも話してくれました。「この泉がわき出た所は、以前は町の中の平地で、アブガルの宮殿の下に広がっていました。このアブガルの宮殿は、少し高い所に建っていました。今もご覧のとおりです。そのころは、宮殿を建てるときはいつも、高い所に建てるならわしだったのです。19:15 けれども、この泉がその場所にわき出てからは、アブガルは息子のマグヌスのために、その場所にこの宮殿を建てました。マグヌスとは、あなたが見ている、父のそばに像が置かれているあの人です。ただし、泉が宮殿の中に取り込まれるように建てたのです」19:16 聖なる監督はこうしたことをすべて話してから、わたしに言いました。「さあ、門へ行きましょう。お話しした手紙を持って、急使アナニヤが入って来た門です」その門に着くと、監督は立って祈りをしました。そして、その手紙をわたしたちに読んで聞かせました。それから監督はもう一度わたしたちを祝福し、また祈りをしました。19:17 聖なる監督は、こんなことも話してくれました。急使アナニヤが主の手紙を持ってこの門から入ったその日から今日まで、この門は守られているそうです。汚れた人も、喪に服している人も、この門を通らないようにというので

す。死んだ人の遺体も、この門からは運び出さないのだそうです。19:18 聖なる監督は、アブガルとその一族の墓も見せてくれました。とても美しい墓ですが、古いやり方で造られていました。また、アブガル王が初めに住んでいた上の宮殿へも、わたしたちを連れて行ってくれました。そのほかにも場所があれば、見せてくれました。19:19 とてもうれしかったことが、もう一つあります。聖なる監督は、アブガルから主への手紙と、主からアブガルへの手紙を、先にそこでわたしたちに読んでくれていました。その手紙を、この聖なる人からいただけたのです。故郷にもその写しは持っていました。それでも、ここでこの人からいただけるのは、もっとうれしく思えたのです。もしかすると、故郷のわたしたちのもとには、何か欠けたものが届いていたかもしれないからです。実際、ここでいただいたもののほうが、本当に中身が多いのです。ですから、わたしたちの神イエスがお許しになって、故郷に帰れたら、わたしの魂である皆さまにも読んでいただけます。

20章　ハラン

20:1 こうして、そこに三日とどまった後、わたしはさらに先へ、カルラエまで行かなければなりませんでした。今はそう呼ばれていますが、聖書ではハランと言われ、聖なるアブラハムがとどまった所です。創世記に書いてあるとおりで、主はアブラハムにこうお語りになりました。『あなたは国を出て、父の家を離れ、ハランに行きなさい』[1]云々（創世記一二・一）。20:2 そこ、つまりハランに着くと、わたしはすぐに、町の中にある教会へ行きました。その土地の監督にも、すぐに会いました。本当に聖なる人で、神の人です。この監督もまた修道士で、告白者でもありました。監督はすぐに、わたしたちが見たいと願っていた場所を、そこですべて見せてくださいました。20:3 まず、監督はすぐにわたしたちを、町の外にある教会へ連れて行ってくれました。聖なるアブラハムの家があった場所に建つ教会です。つまり、その家の土台そのものの上に、同じ石で建てられているのです。少なくとも、聖なる監督はそう言っていました。その教会に着くと、わたしたちは祈りをしました。創世記からその箇所が読まれ、詩篇も一つ唱えられました。もう一度祈りをし、監督がわたしたちを祝福してから、外に出ました。20:4 監督はまた、聖なるリベカが水をくんでいたあの井戸にも、わたしたちを連れて行ってくださいました（創世記二四・一五～二〇）。聖なる監督はわたしたちに言いました。「これがその井戸です。聖なるリベカは、ここでらくだに水を飲ませました。聖なるアブラハムのしもべ、つまりエリエゼルのらくだです」こうして監督は、一つ一つをわたしたちに見せてくださいました。20:5 尊い姉妹の皆さま、さきに町の外にあると言った教会は、初めにアブラハムの家があった所です。そこには今、殉教者の記念堂も建っています。ヘルピディウスという名の、ある聖なる修道士の記念堂です。わたしたちにとってたいへんうれしいことに、そこに着いたのは、ちょうど殉教者の日の前日でした。聖なるヘルピディウスの日で、四月二十三日です。この日には、あらゆる所から、メソポタミヤの隅々から、修道士たちがみなハランへ下りて来ることになっていました。荒野にこもって暮らす、あのすぐれた人たち、修行者と呼ばれる人たちまでも、その日のために来るのです。その日は、そこでたいへん盛大に祝われます。聖なるアブラハムを記念するためでもあります。今教会のある所が、アブラハムの家だったからです。その教会に、この聖なる殉教者の遺体が納められているのです。20:6 こうして、思いもかけず、たいへんうれしいことになりました。そこで、メソポタミヤの聖なる修道士たち、本当に神の人である人たちに会えたのです。名声と暮らしぶりが遠くまで聞こえていた人たちにも会えました。わたしは、その人たちにはとても会えるとは思っていませんでした。神にとって、わたしにこのこともかなえるのが、できないことだったからではありません。神はすべてをかなえてくださっていたのです。そうではなく、こう聞いていたからです。この人たちは、復活祭の日とこの日のほかは、自分の住む所から下りて来ないというのです。多くの奇跡を行うほどの人たちだからです。それに、さきに言ったこの殉教者の日が何月なのかも、わたしは知りませんでした。こうして神のお導きで、望んでもいなかったその日に、わたしはそこに着いたのです。20:7 そこで、わたしたちはそこにも二日とどまりました。殉教者の日のためと、あの聖なる人たちに会うためです。その人たちは、たいへん快くわたしを迎え入れてあいさつを受け、話しかけてくださいました。わたしにはもったいないことでした。殉教者の日が過ぎると、その人たちはすぐに、もうそこには姿を見せませんでした。その夜のうちに、荒野へ、それぞれが自分の修道の住まいのある所へと帰って行ったのです。20:8 一方、この町の中では、わずかな聖職者と聖なる修道士たちのほかに、キリスト者は一人も見当たりませんでした。修道士たちといっても、町に住んでいる人がいればのことです。町の人はみな異教徒なのです。わたしたちは、初めに聖なるアブラハムの家があったあの場所を、アブラハムを記念して、たいへんうやうやしく敬います。それと同じように、この異教徒たちも、町から千歩ほどの所にある場所を、たいへんうやうやしく敬っています。ナ

ホルとベトエルの墓のある場所です。20:9 この町の監督は、聖書にたいへん通じていました。それで、わたしは尋ねました。「監督さま、どうかお願いです。わたしが聞きたいと思っていることを教えてください」監督は言いました。「娘よ、何でも言ってごらんなさい。知っていることなら、お話ししましょう」そこでわたしは言いました。「聖なるアブラハムが、父テラ、妻サラ、弟の子ロトと一緒にこの場所に来たことは、聖書で知っています（創世記一一・三一）。けれども、ナホルとベトエルがいつこの場所に移って来たのかは、読んだことがありません。ただ、これだけは知っています。後に、アブラハムのしもべがハランに来たのです。ナホルの子ベトエルの娘リベカを、主人アブラハムの息子、つまりイサクの妻に迎えるためでした（創世記二四・一〇、一五、二二・二三）」20:10 すると聖なる監督は言いました。「娘よ、本当に、あなたの言うとおり、創世記には、聖なるアブラハムが家族と一緒にここに移って来たと書いてあります（創世記一一・三一）。けれども、ナホルとその家族、またベトエルについては、いつ移って来たのか、正典の聖書は言っていません。しかし、明らかに、彼らも後にここへ移って来たのです。現に、その墓もここに、町から千歩ほどの所にあります。聖書は本当にこのことを証ししています。聖なるリベカを迎えるために、聖なるアブラハムのしもべがここに来ました。また、聖なるヤコブもここに来て、アラムびとラバンの娘たちをめとったのです（創世記二八・二、五、一〇）」20:11 そこでわたしは、あの井戸がどこにあるのかを尋ねました。アラムびとラバンの娘ラケルが飼っていた羊に、聖なるヤコブが水を飲ませた井戸です。監督はわたしに言いました。「その場所は、ここから六マイルの所にあります。ある村のそばで、その村は当時、アラムびとラバンの屋敷でした。行きたいと思うときは、わたしたちも一緒に行って、お見せしましょう。そこには、とても聖なる修道士や修行者が大勢いて、聖なる教会もあるのです」20:12 聖なる監督には、こんなことも尋ねました。テラが家族と一緒に初めに住んでいた、あのカルデヤ人の場所は、いったいどこにあるのかと（創世記一一・二八）。すると聖なる監督は言いました。「娘よ、あなたが尋ねるその場所は、ここから十番目の宿駅の所、ペルシャの奥にあります。ここからニシビスまでが五宿駅、そこから、カルデヤ人の町だったウルまでが、さらに五宿駅です。けれども今は、ローマ人はそこへ行けません。その一帯はみな、ペルシャ人が押さえているのです。ローマ人と、ペルシャ人やカルデヤ人との境にあるこの地方は、とくに『東方』と呼ばれています」20:13 監督は、ほかにもいろいろなことを話してくださいました。ほかの聖なる監督たちや聖なる修道士たちが、いつも話してくださったのと同じです。けれども、それはみな、神の聖書のことか、聖なる人たち、つまり修道士たちのわざのことでした。すでに世を去った人たちが、どんな奇跡を行ったか。また、まだこの世に生きている人たちが、日ごとに何を行っているか。ただし、生きている人のことは、修行者たちのことだけです。皆さまには、思い違いをしていただきたくないのです。修道士たちの話は、神の聖書のことか、すぐれた修道士たちのわざのことで、ほかの話であったためしはありません。

訳注

1 日本語の聖書では『わたしが示す地に行きなさい』。

21〜23章　帰り道とコンスタンティノポリス

21:1 そこで二日過ごした後、監督はわたしたちを、あの井戸へ連れて行ってくれました。聖なるヤコブが、聖なるラケルの羊に水を飲ませた井戸です。その井戸は、カルラエから六マイルの所にあります。井戸をたたえて、そのすぐそばに、とても大きく美しい聖なる教会が建てられています。その井戸に着くと、監督が祈りをしました。創世記からその箇所が読まれ、その場所にふさわしい詩篇も一つ唱えられました。もう一度祈りをしてから、監督はわたしたちを祝福しました。21:2 わたしたちはそこで、井戸のそばに横たわる、とてつもなく大きなあの石も見ました。聖なるヤコブが井戸の口から転がした石で、今も示されているのです。21:3 その井戸のまわりには、ほかにはだれも住んでいません。そこにある教会の聖職者たちと、近くに自分の修道の住まいを持つ修道士たちだけです。聖なる監督は、この修道士たちの暮らしぶりをわたしたちに話してくれました。その暮らしぶりは、本当に聞いたこともないようなものでした。こうして、教会で祈りをしてから、わたしは監督と一緒に、聖なる修道士たちの修道の住まいを訪ねました。神に感謝し、修道士たちにも感謝しました。この人たちは、わたしがその住まいに入るたびに、どこでも快く迎え入れ、話しかけてくださいました。その言葉は、この人たちの口から出るのにふさわしいものでした。そのうえ、わたしにも、わたしと一緒にいた人みなにも、祝福の品をくださいました。修道士たちが祝福の品を与えるならわしのとおりです。ただ、自分の修道の住まいに快く迎え入れる人たちにだけ与えるのです。21:4 その場所は広い平野にあるので、向かい側にたいへん大きな村があるのを、聖なる監督が見せてくれました。井戸から五百歩ほどの所で、わたしたちはその村を通って行きました。監督の話では、この村はかつてアラムびとラバンの屋敷だった所で、ファダナ[1]と呼ばれています。その村では、ヤコブのしゅうと、アラムびとラバンの墓を見せてもらいました。ラケルが父のテラピムを盗み出した場所も見せてもらいました（創世記三一・一九）。21:5 こうして神の名によって、すべてを見終えると、わたしは聖なる監督と聖なる修道士たちに別れを告げました。この人たちは、わたしたちをその場所まで案内してくださっていたのです。わたしたちは、アンテオケから来た道と宿駅を通って帰りました。

22:1 アンテオケに戻ると、わたしはその後一週間そこにとどまり、旅に要るものが整うのを待ちました。こうしてアンテオケを出発し、いくつかの宿駅を通って、キリキヤという州に着きました。この州の州都はタルソです。タルソには、エルサレムへ行くときにも、すでに来ていました。22:2 けれども、タルソから三つ目の宿駅の所、つまりイサウリアに、聖なるテクラの記念堂があります。それで、そこへも行けたらたいへんうれしいと思いました。とても近い所だったからなおさらです。

23:1 そこで、タルソを出発して、まだキリキヤの内にある海辺の町に着きました。ポンペイオポリスという町です。そこからイサウリアの境に入り、コリュコスという町に泊まりました。三日目に、イサウリアのセレウキアという町に着きました。着くと、わたしはその町の監督を訪ねました。修道士から監督になった、本当に聖なる人です。その町では、とても美しい教会も見ました。23:2 町から聖なるテクラの所までは、千五百歩ほどありました。その場所は町の向こう、丘の上ですが、平らな所です。それで、わたしはむしろそちらへ足を延ばし、とどまるつもりだった日々をそこで過ごすことにしました。そこには、聖なる教会のまわりに、男と女の数えきれないほどの修道の住まいがあるだけです。23:3 そこで、わたしのとても親しい人に会いました。聖なる女性の執事で、マルタナという名の人です。東方ではだれもが、この人の暮らしぶりをほめていました。わたしは、この人とエルサレムで知り合っていました。この人が祈りのためにエルサレムへ上って来ていたのです。この人は、世を捨てた人たちやおとめたちの修道の住まいを治めていました。わたしを見たときの、この人とわたしの喜びがどれほどだったか、書き表すことなどできるでしょうか。23:4 話を戻しましょう。

その丘一帯には、修道の住まいがたくさんあります。真ん中には大きな壁があって、教会を囲んでいます。その教会の中に記念堂があり、その記念堂はたいへん美しいものです。この壁が築かれたのは、イサウリア人から教会を守るためです。イサウリア人はたいへん性質が悪く、よく盗みを働きます。そこに属する修道の住まいに、何か手出しをさせないためです。23:5 こうして神の名によってそこに着くと、記念堂で祈りをし、聖なるテクラの行伝もすべて読まれました。わたしは、わたしたちの神キリストに限りなく感謝しました。ふさわしくなく、値しないわたしの願いを、何から何までかなえてくださったのです。23:6 こうしてそこで二日過ごし、そこにいた聖なる修道士たちや世を捨てた人たちにも、男にも女にも会いました。祈りをして聖餐にあずかってから、わたしはタルソへ、もとの道に戻りました。そこに三日とどまってから、神の名によって、そこから旅を続けました。こうしてその日のうちに、マンソクレナスという宿駅に着きました。タウロス山のふもとにある宿駅で、そこに泊まりました。23:7 次の日、そこからタウロス山を越え、行くときに通った州を一つずつ、すでに知っている道を進みました。カパドキヤ、ガラテヤ、ビテニヤです。そしてカルケドンに着き、そこに泊まりました。そこには聖なるエウフェミアのたいへん名高い記念堂があり、わたしは前からそれを知っていたからです。23:8 こうして次の日、海を渡って、コンスタンティノポリスに着きました。わたしたちの神キリストに感謝しました。ふさわしくなく、値しないわたしに、これほどの恵みを与えてくださったからです。つまり、行こうという思いばかりか、願っていた所を巡る力も与えてくださいました。コンスタンティノポリスにもう一度戻る力も与えてくださったのです。23:9 そこに着くと、わたしはどの教会も、使徒たちの教会も、そこに数多くある殉教者の記念堂もみな巡りました。そして、わたしたちの神イエスに感謝し続けました。これほどまでに、わたしにあわれみを注いでくださったからです。23:10 わたしの光である皆さま、この地からこれを皆さまに書き送っている今、わたしはもう次の旅を決めています。わたしたちの神キリストの名によって、アジヤへ、つまりエペソへ行くつもりなのです。聖なる、幸いな使徒ヨハネの記念堂で祈るためです。この後も、わたしがなおからだのうちにあって、ほかにも知ることのできた場所があればお伝えします。神がかなえてくださるなら、わたし自身が皆さまにじかにお話しします。あるいは、もし心が別のほうに決まったなら、書いてお知らせします。わたしの光である皆さま、ただわたしを覚えていてください。わたしがからだのままでいるにしても、もうからだを離れているにしても（第二コリント一二・三）。

訳注

1 創世記のパダンアラムに当たる名とみられる。

24章　日ごとの祈り

24:1 さて、聖なる場所で毎日どのような務めが行われているかを、皆さまに知っていただかなければと思いました。皆さまがこのことを喜んで知ろうとなさるのを、わたしは知っているからです。毎日、鶏が鳴く前に、アナスタシス[1]の戸がすべて開かれます。そして、ここで言う修道士たちとおとめたちが、みな下りて来ます。この人たちだけではありません。そのうえ、一般の人たちも、男も女も来ます。ただし、早くから目を覚ましていたい人たちだけです。その時から夜が明けるまで、賛歌が唱えられ、詩篇が応唱され、交唱も同じように唱えられます。そして賛歌ごとに祈りをします。毎日、長老たちが二人か三人ずつ、執事たちも同じように、交代で修道士たちと一緒にいます。賛歌と交唱のたびに祈りを唱えるためです。24:2 空が白み始めると、朝の賛歌を唱え始めます。すると、監督が聖職者たちと一緒にやって来ます。そしてすぐにほら穴の中に入り、仕切りの内から、まずすべての人のために祈りを唱えます。監督自身も、望む人々の名を挙げて思い起こします。それから洗礼志願者たちを祝福します。また祈りを唱え、信徒たちを祝福します。その後、監督が仕切りの内から出て来ると、みなが監督の手のもとに進み出ます。監督は出て行きながら、一人ずつ祝福します。こうして、もう明るくなったころに散会となります。24:3 また第六時に、みなが同じようにもう一度アナスタシスに下りて来ます。そして、監督が呼ばれるまで、詩篇と交唱が唱えられます。監督も同じように下りて来ますが、座りません。すぐにアナスタシスの仕切りの内に、つまり、朝にも入ったほら穴の中に入ります。そこで、同じようにまず祈りをし、それから信徒たちを祝福します。そして監督が仕切りの内から出て来ると、同じように人々がその手のもとに進み出ます。第九時にも、第六時と同じように行われます。24:4 第十時の務めは、ここでは「リュクニコン」と呼ばれます。わたしたちの言う「ともしびの祈り」です。この時にも、同じように群衆がみなアナスタシスに集まります。ともしびとろうそくがみなともされ、限りなく明るくなります。その火は外から持って来るのではありません。奥のほら穴から運び出されるのです。そこには、夜も昼も、いつも灯火がともっています。つまり、仕切りの内から火を取るのです。ともしびの祈りの詩篇も唱えられ、交唱も長く唱えられます。すると監督が呼ばれ、下りて来て、上の席に座ります。長老たちもそれぞれの席に座ります。そして賛歌と交唱が唱えられます。24:5 それがならわしどおり唱え終えられると、監督は立ち上がり、仕切りの前に、つまりほら穴の前に立ちます。そして執事の一人が、いつものならわしのとおり、一人一人を祈りの中で思い起こします。執事が一人一人の名を言うたびに、そこにはいつも大勢の子供たちが立っていて、そのつど「キュリエ・エレエーソン」と応えます。わたしたちの言う「主よ、あわれんでください」です。その声は数えきれないほどです。24:6 執事が言うべきことをすべて言い終えると、監督がまず祈りを唱え、すべての人のために祈ります。それから、信徒たちも洗礼志願者たちも、みな一緒に祈ります。また執事が声をかけ、洗礼志願者は一人一人、立っているままで頭を下げるように言います。そして監督が立って、洗礼志願者たちの上に祝福を唱えます。また祈りをします。執事がもう一度声をかけ、信徒たちは一人一人、立ったまま頭を下げるようにと促します。監督は信徒たちを祝福します。こうしてアナスタシスでの散会となります。24:7 そして人々が一人ずつ、監督の手のもとに進み出始めます。その後、監督は賛歌とともにアナスタシスから十字架の所[2]まで導かれ、民もみな一緒に行きます。そこに着くと、監督はまず祈りをし、洗礼志願者たちを祝福します。また別の祈りをし、信徒たちを祝福します。その後、監督も群衆もみな、さらに十字架の後ろへ行きます。そこでも、十字架の前と同じことが行われます。アナスタシスでと同じように、十字架の前でも、十字架の後ろでも、人々が監督の手のもとに進み出ます。どこにも、大きなガラスのともしびがたくさん吊るされています。燭台もたくさんあります。アナスタシスの前にも、十字架の前にも、十字架の後ろにもです。こうして、これらのことはみな、暗くなるころに終わりま

す。この務めは、六日のあいだ毎日、このように十字架の所とアナスタシスで行われます。24:8 七日目、つまり主の日には、鶏が鳴く前に、群衆がみな集まります。その場所に入りきれるかぎりの人で、まるで復活祭のときのようです。集まるのは、そこに、アナスタシスのすぐそばにある聖堂です。ただし、アナスタシスの外です。そこには、このために明かりが吊るされています。鶏が鳴くときに間に合わないのを恐れて、人々は前もって来て、そこに座っているのです。そして賛歌が唱えられ、交唱も唱えられます。賛歌と交唱のたびに祈りをします。集まって来る群衆のために、長老たちも執事たちも、徹夜の祈りに備えて、いつもそこに控えているからです。鶏が鳴く前には聖なる場所を開かない、というのがならわしなのです。24:9 最初の鶏が鳴くとすぐに、監督が下りて来て、アナスタシスのほら穴の中に入ります。戸がすべて開かれ、群衆がみなアナスタシスに入ります。そこには、もう数えきれないほどの明かりがともっています。民が入るとすぐに、長老のだれか一人が詩篇を唱え、みなが応えます。その後、祈りをします。次に執事のだれか一人が詩篇を唱え、同じように祈りをします。三つ目の詩篇も、聖職者のだれか一人によって唱えられ、三度目の祈りをして、すべての人を思い起こします。24:10 こうして三つの詩篇が唱えられ、三つの祈りが済むと、香炉もアナスタシスのほら穴の中に運び込まれます。アナスタシスの聖堂全体が香りで満たされるためです。そのとき監督は、そこで仕切りの内に立っています。そして福音書を取り、戸口に進み出て、監督自身が主の復活の箇所を読みます。それが読まれ始めると、すべての人のうめき声とうなり声がわき起こり、涙があふれます。どれほどかたくなな人でも、主がわたしたちのためにこれほどの苦しみをお受けになったことに心を動かされ、涙を流すほどです。24:11 福音書が読まれると、監督は出て来て、賛歌とともに十字架の所へ導かれます。民もみな一緒です。そこでもう一度、詩篇が一つ唱えられ、祈りをします。また監督が信徒たちを祝福し、散会となります。24:12 監督が出て行くと、みながその手のもとに進み出ます。監督が自分の家に引き取るとすぐに、もうその時から、修道士たちはみなアナスタシスに戻ります。そして夜が明けるまで、詩篇と交唱が唱えられ、詩篇と交唱のたびに祈りをします。長老たちと執事たちが、毎日交代で、民と一緒にアナスタシスで夜を明かすからです。一般の人たちも、男でも女でも、望む人は夜が明けるまでそこにいます。望まない人は家に帰り、床について眠ります。

訳注

1 『復活』の意。主の墓の上に建つ円い聖堂。

2 主が十字架にかけられたゴルゴタの場所。

25〜26章　主の日と公現祭

25:1 夜が明けると、主の日なので、大きな教会へ行列して行きます。コンスタンティヌスが建てた教会で、ゴルゴタの十字架の後ろにあります。そして、どこででも主の日に行われているならわしのとおりに、すべてが行われます。ただ、ここには次のようなならわしがあります。座っている長老たちのうち、望む人はみな説教をし、その人たちみなの後で、監督が説教をするのです。この説教は、民がいつも聖書と神への愛について教えられるように、主の日にはいつも行われます。説教が語られるので、教会の散会まではたいへん時間がかかります。そのため、散会は第四時か、ことによると第五時の前になります。25:2 どこででも行われているならわしのとおりに、教会の散会が済みます。すると、修道士たちが賛歌を唱えながら、監督を教会からアナスタシスまで導きます。監督が賛歌とともに来始めると、アナスタシスの聖堂の戸がすべて開かれ、民がみな入ります。ただし信徒たちだけで、洗礼志願者たちは入りません。25:3 民が入ると、監督が入り、すぐにほら穴の仕切りの内に入ります。まず神に感謝がささげられ、それからすべての人のために祈りをします。その後、執事が声をかけ、みなが立っているままで頭を下げるように言います。そして監督は、内側の仕切りの内に立って人々を祝福し、その後に出て来ます。25:4 監督が出て来ると、みながその手のもとに進み出ます。こうして散会は、第五時か第六時近くまで延びることになります。ともしびの祈りも、毎日のならわしどおり同じように行われます。このならわしは、一年を通じて日ごとにこのように守られます。ただし祝祭日は別で、その日にどのように行われるかは、後で書き記します。25:5 これらすべての中でも、たいへんすぐれていることがあります。いつもふさわしい詩篇と交唱を唱えるようにしていることです。夜に唱えられるものも、それに対して朝早く唱えられるものも同じです。日中の第六時や第九時、ともしびの祈りに唱えられるものもそうです。どれもいつもふさわしく、筋が通っていて、行われている事柄そのものにかかわるものなのです。25:6 一年じゅう、主の日にはいつも大きな教会へ行列して行きます。つまりゴルゴタにある教会、十字架の後ろにある、コンスタンティヌスが建てた教会です。ただ一度の主の日、つまり五旬節の五十日目の主の日だけは、シオンへ行列して行きます。そのことは、後に書いてあるのをご覧になるでしょう。ただしシオンへは第三時の前に着けるように、まず大きな教会で散会となり[1]『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』云々と、その後に続くことば（マタイ二一・九）。徒歩で行く修道士たちのために、ゆっくり進まなければなりません。こうして、人が人の顔を見分けられるようになる時刻に、エルサレムに着きます。つまり明け方近くですが、まだ明るくなる前です。25:7 着くと、監督はすぐにアナスタシスに入り、みなも一緒に入ります。そこでは、もう明かりがこのうえなく明るくともっています。そこで詩篇が一つ唱えられ、祈りをし、監督によって、まず洗礼志願者たちが、次に信徒たちが祝福されます。監督は引き取り、人々はそれぞれ自分の宿に戻ります。休むためです。しかし修道士たちは、夜が明けるまでそこにいて、賛歌を唱えます。25:8 民が休んで、第二時が始まるころになると、みながゴルゴタにある大きな教会に集まります。その日、教会も、アナスタシスも、十字架の所も、ベツレヘムも、どのように飾られるかは、書くまでもありません。そこには、金と宝石と絹のほかには何も見えないのです。幕を見ても、金の縞の入った総絹です。垂れ幕を見ても、同じように金の縞の入った総絹です。その日には、金と宝石で飾った、あらゆる種類の器具が持ち出されます。燭台や灯明や灯火、さまざまな器具の数や重さを、見積もることも、書き表すことも、できるでしょうか。25:9 また、建物そのものの飾りについては、何と言えばよいでしょうか。コンスタンティヌスは母の立ち会いのもとで、その国の力の及ぶかぎり、金とモザイクと高価な大理石で飾ったのです。大きな教会も、アナスタシスも、十字架の所も、エルサレムのほかの聖なる場所もそうです。25:10 話を戻しましょう。最初の日には、ゴルゴタにある大きな教会で散会となります。説教がなされ、聖書の箇所が一つずつ読まれ、賛歌が唱

えられますが、どれもその日にふさわしいものです。その後、教会の散会が済むと、ならわしどおり賛歌とともにアナスタシスへ行きます。こうして散会は、第六時ごろになります。25:11 その日も、ともしびの祈りは毎日のならわしどおり同じように行われます。次の日も、同じようにゴルゴタのその教会へ行列して行きます。三日目も同じです。こうして三日のあいだ、この喜びの祝いはみな、コンスタンティヌスが建てた教会で、第六時まで行われます。四日目はエレオナ、つまりオリブ山にある、たいへん美しい教会で、同じようにすべてがそのように飾られ、そのように祝われます。五日目はラザリウムで、エルサレムから千五百歩ほどの所にあります。六日目はシオン、七日目はアナスタシス、八日目は十字架の所です。こうして八日のあいだ、この喜びの祝いとこの飾りは、先に名を挙げたすべての聖なる場所で行われます。25:12 一方ベツレヘムでは、まる八日のあいだ、毎日この飾りがあり、同じ喜びの祝いが行われます。行うのは、その土地の長老たちと聖職者のすべて、そこに属する修道士たちです。夜に、みなが監督と一緒にエルサレムへ帰ります。その時から、その土地の修道士たちはみな、ベツレヘムの教会で夜を明かします。夜が明けるまで、賛歌と交唱を唱えているのです。監督は、この日々をいつもエルサレムで守らなければならないからです。この日の祝祭と喜びのために、数えきれない群衆が、方々からエルサレムに集まって来ます。修道士たちだけではありません。一般の人たちも、男も女も集まります。

26:1 公現祭から四十日目の祭り[2]は、ここではこのうえなく盛大に祝われます。その日には、アナスタシスへの行列があり、みなが行列して行きます。そして、まるで復活祭のときのように、すべてが定めの順序どおりに、このうえない喜びのうちに行われます。長老たちもみな説教をし、その後に監督も説教をします。いつも、福音書の次の箇所について語るのです。四十日目にヨセフとマリヤが主を宮に連れて行き、シメオンと、パヌエルの娘で女預言者のアンナが主を見た箇所です。また、二人が主を見て語ったことばや、両親がささげたささげ物そのものについて語ります（ルカ二・二一～三九）。その後、ならわしのことがすべて順序どおりに行われると、秘義が行われ、こうして散会となります。

訳注

1 ここで写本の一葉が失われている。続きは公現祭の祝いの記録。

2 当時のエルサレムでは公現祭に主の降誕を祝った。

27〜28章　四旬節

27:1 復活祭の時期が来ると、次のように祝われます。わたしたちのところでは、復活祭の前に四旬節を守ります。それと同じように、ここでは復活祭の前に八週を守ります。八週を守るのは、主の日と土曜日には断食しないからです。ただし、復活祭の徹夜の祈りのある土曜日一日だけは別で、その日は断食しなければなりません。その日のほかには、ここでは一年じゅう、土曜日に断食することはけっしてありません。こうして、八週から八回の主の日と七回の土曜日を除きます。先に言ったように、土曜日のうち一度は断食しなければならないからです。すると、断食する日が四十一日残ります。これを、ここでは「ヘオルタイ」と呼びます。つまり「四旬節」です。27:2 それぞれの週の日々は、次のように行われます。主の日には、最初の鶏が鳴くと、監督がアナスタシスの中で、福音書から主の復活の箇所を読みます。一年じゅう、主の日にしているのと同じです。そして夜が明けるまで、一年じゅう主の日に行われることが、同じようにアナスタシスと十字架の所で行われます。27:3 その後、朝になると、いつも主の日にするように、大きな教会へ行列して行きます。マルテュリウムと呼ばれる教会で、ゴルゴタの十字架の後ろにあります。そこで、主の日に行うならわしになっていることが行われます。そして同じように、教会の散会が済むと、いつも主の日にするように、賛歌とともにアナスタシスへ行きます。これらが行われているうちに、第五時になります。ともしびの祈りも同じように、その時刻に行われます。いつものとおり、アナスタシスと十字架の所で行われ、それぞれの聖なる場所でも行われます。主の日には第九時の務めが行われるからです。27:4 また月曜日にも、一年じゅうと同じように、最初の鶏が鳴くとアナスタシスへ行きます。そして朝まで、いつものことが行われます。第三時にもう一度アナスタシスへ行き、一年じゅう第六時に行うならわしのことが行われます。四旬節の日々には、第三時にも行くことが加わるからです。第六時と第九時とともしびの祈りも、この聖なる場所で一年を通していつも行うならわしのとおりに行われます。27:5 火曜日にも、すべてが月曜日と同じように行われます。水曜日には、同じように夜のうちにアナスタシスへ行き、朝までいつものことが行われます。第三時と第六時も同じです。しかし第九時には、シオンへ行列して行きます。いつも、つまり一年じゅう、水曜日と金曜日の第九時にはシオンへ行列して行くのがならわしだからです。この土地では、殉教者の記念の日に当たらないかぎり、水曜日と金曜日には、いつも洗礼志願者たちも断食します。そのため、第九時にシオンへ行列して行くのです。もし四旬節のあいだに、たまたま殉教者の記念の日が水曜日か金曜日に当たれば、第九時にシオンへ行列して行くこともしません。27:6 さて四旬節の日々には、先に言ったように、水曜日の第九時に、一年じゅうのならわしのとおりシオンへ行列して行きます。そして第九時に行うならわしのことが、ささげ物を除いてすべて行われます。民がいつも律法を学ぶように、監督も長老も欠かさず説教するのです。散会が済むと、民は賛歌を唱えながら、そこから監督をアナスタシスまで導きます。そこからは、アナスタシスに入るときには、もうともしびの祈りの時刻になっているように進んで来ます。こうして賛歌と交唱が唱えられ、祈りをし、アナスタシスと十字架の所で、ともしびの祈りの散会となります。27:7 四旬節のこの日々には、ともしびの祈りの散会は、一年のほかの時期よりいつも遅くなります。木曜日には、すべてが月曜日と火曜日と同じように行われます。金曜日には、すべてが水曜日と同じように行われます。同じように第九時にシオンへ行き、同じようにそこから賛歌とともに、監督がアナスタシスまで連れて来られます。しかし金曜日には、アナスタシスで徹夜の祈りが行われます。賛歌とともにシオンから着いた時から、朝まで続くのです。つまり、ともしびの祈りの時刻から、次の日、すなわち土曜日の朝に入るまでです。ささげ物はアナスタシスで早めにささげられ、日の出前に散会となります。27:8 夜通し、代わる代わる、応唱の詩篇が唱えられ、交唱が唱えられ、さまざまな聖書の箇所が読まれます。それがみな朝まで続きます。土曜日にアナスタシスで行われる務

め、つまりささげ物は、日の出前に行われます。日が昇り始める時刻には、アナスタシスでの散会も済んでいるようにするためです。こうして、四旬節のそれぞれの週が祝われます。27:9 土曜日の散会が早い、つまり日の出前だと言いました。それは、ここで「週の人たち」と呼ばれる人たちが、早く断食を終えられるようにするためです。ここの四旬節の断食のならわしは、次のようなものだからです。ここで「週の人たち」と呼ばれる人たち、つまり週を通して断食する人たちは、主の日には食事をします。第五時に散会となるからです。そして主の日に食事をしたら、もう何も食べません。次に食べるのは、土曜日の朝、アナスタシスで聖餐にあずかってすぐです。そこで、この人たちが早く断食を終えられるように、土曜日には日の出前にアナスタシスで散会となるのです。ただ、この人たちのために朝に散会となると言いましたが、この人たちだけが聖餐にあずかるのではありません。その日にアナスタシスで聖餐にあずかりたい人は、みなあずかります。

28:1 ここの四旬節の断食のならわしは、次のようなものです。ある人たちは、主の日の散会の後、つまり第五時か第六時に食事をします。そうしたら、次の土曜日のアナスタシスでの散会の後まで、一週間ずっと食べません。週を通して断食する人たちです。28:2 土曜日の朝に食事をしたら、その晩はもう食べません。次の日、つまり主の日に、教会の散会の後、第五時かそれより後に食事をします。その後は、先に言ったように、次の土曜日まで、もう食べません。28:3 ここには次のようなならわしがあります。ここで言う世を捨てた人たちは、男も女もみな、四旬節の日々だけでなく、一年じゅう、食べるときは一日に一度だけ食べます。世を捨てた人たちのうちには、断食の週を、先にわたしたちが述べたようにまるごと通すことのできない人たちもいます。その人たちは、四旬節のあいだずっと、週の中ほどの木曜日に夕食をとります。それもできない人は、四旬節のあいだずっと、二日ずつの断食をします。それもできない人は、晩から晩へと、晩に一度だけ食べます。28:4 どれだけしなければならないかを、だれも人に求めません。それぞれができるだけのことをします。多くした人がほめられることも、少ししかしなかった人がとがめられることもありません。ここのならわしは、このようなものです。四旬節の日々のこの人たちの食べ物は、次のとおりです。量ることのできないパン[1]も、油も口にしません。木から取れるものも何も口にしません。ただ水と、小麦粉で作った少しの粥だけです[2]。四旬節は、わたしたちが述べたとおりに行われます。

訳注

1 この句は写本が崩れていて、意味がはっきりしない。
2 ここで写本の語がいくつか欠けている。

29〜32章　ラザリウムの土曜日と大いなる週の初め

29:1 そして、それらの週が終わると[1]徹夜の祈りがアナスタシスで行われます。詩篇を唱えながらシオンから来る、金曜日のともしびの祈りの時刻に始まります。そして土曜日の朝、アナスタシスでささげ物がささげられる時まで続きます。第二週も第三週も第四週も第五週も第六週も、四旬節の第一週と同じように行われます。29:2 第七週が来ると、つまりこの週を入れて、復活祭まであと二週になると、毎日、すべてがそれまでの週と同じように行われます。ただ一つ違うのは徹夜の祈りです。六週のあいだはアナスタシスで行われましたが、第七週の金曜日には、シオンで行われます。六週のあいだアナスタシスで行われたのと同じならわしで行われるのです。徹夜の祈りのあいだずっと、その場所にもその日にもふさわしい詩篇と交唱が唱えられます。29:3 土曜日の夜が明けて朝になり始めると、監督は土曜日の朝のささげ物をささげます。散会となるときに、執事長が声を上げて、「今日は第七時に、みなでラザリウムに集まっていましょう」と告げます。こうして第七時になり始めると、みながラザリウムへ行きます。ラザリウム、つまりベタニヤは、町から二マイルほどの所にあります。29:4 エルサレムからラザリウムへ行くと、ラザリウムの五百歩ほど手前の道ばたに教会があります。ラザロの姉妹マリヤが主をお迎えした場所です。監督がそこに来ると、修道士たちがみな出迎えます。民はそこに入り、賛歌が一つと交唱が一つ唱えられ、ラザロの姉妹が主をお迎えした福音書の箇所が読まれます（ヨハネ一一・二九）。こうして祈りをし、みなが祝福を受けると、そこから賛歌を唱えながらラザリウムまで行きます。29:5 ラザリウムに着くと、大勢の人がみな集まって、その場所だけでなく、まわりの野原もみな人でいっぱいになります。その日とその場所にふさわしい賛歌と交唱が唱えられ、読まれる聖書の箇所も、みなその日にふさわしいものです。そして散会となるときに、復活祭が告げられます[2]。つまり、長老が高い所に上って、福音書に書かれている箇所を読むのです。『過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた』云々（ヨハネ一二・一）。この箇所が読まれ、復活祭が告げられると、散会となります。29:6 この日にこれが行われるのは、福音書に書かれているとおり、このことが過越の祭の六日まえにベタニヤで起こったからです。土曜日から、晩餐の後、夜に主が捕らえられた木曜日までが、六日になります。こうして、みなは町へ、まっすぐアナスタシスへ帰り、ならわしどおりともしびの祈りが行われます。

30:1 次の日、つまり主の日には、復活祭前の週に入ります。ここではこの週を「大いなる週」と呼びます。この日は、鶏の鳴くころから朝まで、アナスタシスと十字架の所で行うならわしのことが行われます。それから主の日の朝、ならわしどおり大きな教会へ行列して行きます。マルテュリウムと呼ばれる教会です。マルテュリウムと呼ばれるのは、ゴルゴタ、つまり十字架の後ろにあるからです。主が苦しみをお受けになった所です。それで、マルテュリウム[3]と呼ぶのです。30:2 大きな教会で、ならわしどおりすべてが祝われると、散会となる前に、執事長が声を上げて、まずこう告げます。「この週は毎日、つまり明日から、第九時に、みなでマルテュリウム、つまり大きな教会に集まりましょう」。続けてもう一度声を上げて、「今日は第七時に、みなでエレオナに集まっていましょう」と告げます。30:3 こうして大きな教会、つまりマルテュリウムで散会となると、監督は賛歌とともにアナスタシスへ導かれます。そこでは、主の日にマルテュリウムの散会の後、アナスタシスで行うならわしのことが済みます。それから、みなそれぞれ家に帰り、急いで食事をします。第七時の初めに、みながエレオナの教会に集まっているためです。エレオナ、つまりオリブ山の教会で、主が教えておられたあのほら穴がある所です。

31:1 第七時になると、民はみなオリブ山、つまりエレオナの教会に登ります。監督も登ります。その日とその場所にふさわしい賛歌と交唱が唱えられ、聖書の箇所も同じように読まれます。第九時になり始めると、賛歌を唱えながらインボモン、つまり主が天にお昇りになった場所へ登り、そこでみな座ります。監督が

いるときは、民はみないつも座るように言われ、ただ執事たちだけがいつも立っているからです。そこでも、その場所とその日にふさわしい賛歌と交唱が唱えられます。あいだに聖書の箇所が読まれ、祈りもはさまれます。31:2 第十一時になり始めると、福音書の箇所が読まれます。子供たちが枝としゅろを持って主をお迎えし、『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』と言った箇所です（マタイ二一・九）。すると監督と民はみな、すぐに立ち上がります。そしてオリブ山の頂から、ずっと歩いて行きます。民はみな、賛歌と交唱を唱えながら監督の前を進み、いつも『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』と応えます。31:3 このあたりにいる子供たちはみな、枝を手にしています。まだ幼くて歩けない子供たちまでそうで、その子たちは親が肩に担いでいます。しゅろの枝を持つ子供もいれば、オリブの枝を持つ子供もいます。こうして、かつて人々が主をお連れしたのと同じ形で、監督が導かれて行きます（マタイ二一・八）。31:4 山の頂から町まで、そしてそこから町じゅうを通ってアナスタシスまで、みなずっと歩いて行きます。身分の高い女の人や男の人がいても、その人たちも歩きます。こうして、応えながら監督を導いて行きます。民が疲れないように、ゆっくり、ゆっくり進みます。そうして、アナスタシスに着くころには、もう夕方です。着くと、どれほど遅くなっていても、ともしびの祈りが行われます。十字架の所でもう一度祈りをし、民は帰されます。

32:1 次の日、つまり月曜日には、最初の鶏が鳴いてから朝まで、アナスタシスで行うならわしのことが行われます。第三時と第六時にも、四旬節のあいだずっと行われていたことが、同じように行われます。第九時には、みなが大きな教会、つまりマルテュリウムに集まります。そこでは夜の第一時まで、ずっと賛歌と交唱が唱えられ、その日とその場所にふさわしい聖書の箇所も読まれます。あいだには、いつも祈りがはさまれます。32:2 ともしびの祈りも、その時刻になると、そこで行われます。こうして、マルテュリウムでの散会は夜になります。散会となると、監督は賛歌とともに、そこからアナスタシスへ導かれます。監督がアナスタシスに入ると、賛歌が一つ唱えられ、祈りをします。洗礼志願者たちが、続いて信徒たちが祝福を受け、散会となります。

訳注

1 ここで写本の語がいくつか欠けている。続きは毎週の金曜日の徹夜の祈り。

2 原文では『過越の祭』と『復活祭』は同じ語。

3 殉教者の記念堂を言う語と同じ。

33〜36章　火曜日から木曜日の夜まで

33:1 火曜日にも、すべてが月曜日と同じように行われます。火曜日に加わるのは、ただ次のことだけです。夜遅く、マルテュリウムで散会となってアナスタシスへ行き、アナスタシスでもう一度散会となります。その後、みなはその夜のうちに、エレオナの山にある教会へ行きます。33:2 その教会に着くと、監督はほら穴の中に入ります。主が弟子たちを教えておられたほら穴です。そして福音書の本を取り、監督自身が立って主のことばを読みます。マタイによる福音書に書かれている、主が『人に惑わされないように気をつけなさい』とお語りになる箇所です（マタイ二四・四）。監督は、主のその語りかけを残らず読み通します。読み終えると、祈りをし、洗礼志願者たちが、続いて信徒たちも祝福を受け、散会となります。みなそれぞれ山から家に帰ります。もう夜もたいへん更けています。

34:1 水曜日には、最初の鶏が鳴いてから一日じゅう、月曜日と火曜日と同じように、すべてが行われます。ただ、夜にマルテュリウムで散会となった後が違います。監督は賛歌とともにアナスタシスへ導かれると、すぐにほら穴に入ります。アナスタシスの中のほら穴で、監督は仕切りの内に立ちます。長老は仕切りの前に立って福音書を取り、ある箇所を読みます。イスカリオテのユダがユダヤ人たちのところへ行き、主を引き渡す代わりに何をもらうかを取り決めた箇所です（マタイ二六・一四）。この箇所が読まれると、民はみな、うめき声とうなり声を上げます。そのとき心を動かされて涙を流さない人は、一人もいないほどです。その後、祈りをし、洗礼志願者たちが、続いて信徒たちが祝福を受け、散会となります。

35:1 木曜日には、最初の鶏が鳴いてから朝まで、アナスタシスで行うならわしのことが行われます。第三時と第六時も同じです。第八時には、民はみな、ならわしどおりマルテュリウムに集まります。ほかの日より早く集まるのは、散会を早く済ませなければならないからです。こうして民がみな集まると、行うべきことが行われます。この日はマルテュリウムでささげ物がささげられ、第十時ごろに同じ所で散会となります。散会となる前に、執事長が声を上げて、「夜の第一時に、みなでエレオナの教会に集まりましょう。今夜は、とても大きな労がわたしたちを待っているからです」と告げます。35:2 マルテュリウムで散会となると、人々は十字架の後ろへ行きます。そこでは賛歌がただ一つ唱えられ、祈りをします。監督はそこでささげ物をささげ、みなが聖餐にあずかります。一年のうちこの日のほかには、十字架の後ろでささげ物がささげられることはないからです。そこでも散会となると、アナスタシスへ行き、祈りをします。ならわしどおり洗礼志願者たちが、続いて信徒たちが祝福を受け、散会となります。こうして、みなそれぞれ急いで家に帰り、食事をします。食べ終えるとすぐに、みなエレオナの、ほら穴のある教会へ行くからです。この日に主が使徒たちと一緒におられたほら穴です。35:3 そこでは夜の第五時ごろまで、その日とその場所にふさわしい賛歌や交唱が、ずっと唱えられます。聖書の箇所も同じように読まれ、あいだに祈りがはさまれます。福音書の箇所も読まれます。この日に主が、その教会の中にある同じほら穴に座って、弟子たちにお語りになった箇所です。35:4 そこから、夜の第六時ごろには、賛歌を唱えながらインボモンへ登って行きます。主が天にお昇りになった場所です。そこでもまた同じように、聖書の箇所が読まれ、賛歌と交唱が唱えられます。どれもその日にふさわしいものです。そこで行われる祈りもみな監督が唱えますが、監督はいつも、その日とその場所にふさわしい祈りを唱えます。

36:1 こうして鶏が鳴き始めると、賛歌を唱えながらインボモンから下り、主がお祈りになった場所に向かいます。福音書に『そしてご自分は、石を投げてとどくほど離れたところへ退き、祈って』云々と書かれている場所です（ルカ二二・四一）。その場所には美しい教会があります。監督と民はみなそこに入り、その場所とその日にふさわしい祈りが唱えられます。ふさわしい賛歌も一つ唱えら

れ、福音書の箇所が読まれます。主が弟子たちに、『誘惑に陥らないように、目をさましていなさい』とお語りになった箇所です（マルコ一四・三八）。その箇所がすべて読まれると、もう一度祈りをします。36:2 そこから、いちばん小さな子供に至るまで、みなが賛歌を唱えながら、監督と一緒に歩いてゲツセマネへ下ります。群衆はあまりに多く、人々は徹夜の祈りに疲れ、毎日の断食で弱っています。そのうえ、あれほど高い山を下らなければなりません。それで、賛歌を唱えながら、ゆっくり、ゆっくりゲツセマネへ向かいます。民みなを照らすために、教会のともしびが二百以上用意されています。36:3 ゲツセマネに着くと、まずふさわしい祈りをし、続いて賛歌が唱えられます。そして福音書の、主が捕らえられた箇所が読まれます。この箇所が読まれると、民はみな、うめき声とうなり声を上げて泣きます。民みなの嘆きの声が、遠く町まで聞こえるかと思うほどです。そのときから、賛歌を唱えながら歩いて町へ向かいます。人がどうにか人の顔を見分けられるようになる時刻に、門に着きます。そこから町の真ん中を通って、ずっと進みます。一人残らずみな、大人も子供も、富む人も貧しい人も、そこにそろっています。とくにこの日は、朝まで徹夜の祈りから離れる人はだれもいません。こうして監督は、ゲツセマネから門まで、そしてそこから町じゅうを通って十字架の所まで導かれます。36:4 十字架の前に着くと、もうかなり明るくなり始めています。そこでもう一度、福音書の箇所が読まれます。人々が主をピラトのもとに連れて行った箇所です（マタイ二七・二、マルコ一五・一、ルカ二三・一、ヨハネ一八・二八）。ピラトが主に、またユダヤ人たちに言ったと書かれていることも、みな読まれます。36:5 その後、監督は民に語りかけ、励まします。民は夜通し労し、この日もまだ労することになるからです。疲れ果てずに、神に望みを置くように、と励ますのです。神は、その労に対して、もっと大きな報いをお与えになるからです。こうして監督は、できるかぎり民を励まし、語りかけて言います。「今はひとまず、それぞれ自分の家に帰って、少し座って休んでください。そして第二時近くには、みなここに集まっていてください。そうすれば、その時から第六時まで、十字架の聖なる木を見ることができます。わたしたちは一人一人、それが自分の救いのためになると信じているのです。第六時からは、わたしたちはみな、もう一度ここ、つまり十字架の前に集まらなければならないからです。夜まで聖書の朗読と祈りに励むためです」。

37章　受難の金曜日

37:1 その後、十字架の所で散会となると、つまり日が昇る前に、みなそれぞれ、すぐに勇んでシオンへ行き、あの柱のもとで祈ります。主がむち打たれた柱です。そこから戻ると、自分の家で少し座って休み、すぐにまたみなが集まります。そして、ゴルゴタの、いま立っている十字架の後ろに、監督の座が置かれます。監督がその座に着くと、前に亜麻布をかけた卓が置かれ、執事たちが卓のまわりに立ちます。そこへ、金めっきをした銀の箱が運ばれて来ます。中には十字架の聖なる木が納められています。箱が開けられて中のものが取り出され、十字架の木も罪状書きも、卓の上に置かれます。37:2 木が卓の上に置かれると、監督は座ったまま、聖なる木の端を両手で押さえます。まわりに立つ執事たちは見張ります。このように見張るのは、次のようなならわしがあるからです。民はみな、信徒も洗礼志願者も、一人ずつ進み出て、卓にかがみ込んで聖なる木に口づけし、通り過ぎて行きます。いつのことか分かりませんが、ある人が聖なる木にかみついて、その一部を盗み取ったと言われています。それで今は、まわりに立つ執事たちがこのように見張っているのです。進み出る人がだれも、二度と同じことをあえてしないためです。37:3 こうして民はみな、一人ずつ通って行きます。みなかがみ込んで、まず額で、次に目で、十字架の木と罪状書きに触れます。そして十字架の木に口づけして、通り過ぎて行きます。手を伸ばして触れる人は、だれもいません。十字架の木に口づけして通り過ぎると、一人の執事が立っています。執事は、ソロモンの指輪と、王たちが油を注がれたあの角を持っています。民は角にも口づけし、指輪にも敬意を表します[1]。第六時まで、民はみな通って行きます。一つの戸から入り、もう一つの戸から出て行くのです。前日、つまり木曜日にささげ物がささげられたのと同じ場所で、これが行われるからです。37:4 第六時になると、十字架の前へ行きます。雨が降っていても暑くても、そうします。その場所には屋根がないからです。つまり、十字架の所とアナスタシスのあいだにある、とても大きく、たいへん美しい中庭のような所です。民はみなそこに集まります。通り道を開けることもできないほどです。37:5 監督の座は十字架の前に置かれます。第六時から第九時までは、聖書の箇所が読まれるほかは何も行われません。読み方は次のとおりです。まず詩篇から、受難について語っている所が読まれます。使徒の書、つまり使徒たちの手紙や使徒行伝からも、主の受難について語っている所が読まれます。福音書からも、主が苦しみをお受けになる箇所が読まれます。また預言書から、主が苦しみをお受けになると預言者たちが語った所が読まれます。そしてまた福音書から、受難について語っている所が読まれます。37:6 こうして第六時から第九時まで、いつもこのように聖書の箇所が読まれ、賛歌が唱えられます。預言者たちが主の受難について、これから起こると言ったことはみな、そのとおりに起こりました。そのことが、福音書によっても、使徒たちの書いたものによっても、民みなに示されるためです。こうしてその三時間のあいだ、民はみな教えられます。前もって言われていなかったことは、何一つ起こらなかったこと。言われたことで、完全には成就しなかったものは、何一つないことです。あいだにはいつも祈りがはさまれます。その祈りも、その日にふさわしいものです。37:7 聖書の箇所が読まれ、祈りがささげられるたびに、民みなが心を動かされて嘆くさまは、驚くほどです。大人も子供も、一人の例外もなく、その日のその三時間に、はかり知れないほど泣くのです。主がわたしたちのために、このような苦しみをお受けになったからです。その後、第九時になり始めると、ヨハネによる福音書の、主が息をおひきとりになった箇所が読まれます（ヨハネ一九・三〇）。それが読まれると、祈りをし、散会となります。37:8 十字架の前で散会となると、すぐにみな、大きな教会のマルテュリウムへ[2]。そこでは、この週のあいだ第九時にマルテュリウムに集まって、夕方まで行うならわしのことが行われます。マルテュリウムで散会となると、アナスタシスへ行きます。そこに着くと、福音書の箇所が読まれます。ヨセフがピラトに主のからだを願い出て、新しい墓に納めた箇所です（ヨハネ一

九・三八）。それが読まれると、祈りをし、洗礼志願者たちが祝福を受け、こうして散会となります。37.9 この日は、アナスタシスで夜を明かすようにと告げられることはありません。民が疲れていることが分かっているからです。それでも、そこで夜を明かすのがならわしです。それで、民のうち望む人、いや、できる人は夜を明かします。できない人は、朝までそこで夜を明かすことはしません。聖職者たちはそこで夜を明かします。つまり、体の強い人や若い人たちです。そして夜通し、朝まで、賛歌と交唱が唱えられます。とても大勢の人が夜を明かします。宵からの人もいれば、真夜中からの人もいて、それぞれができるかぎりそうするのです。

訳注

1 ここで写本の語がいくつか欠けている。第二時ごろから、の意とみられる。
2 ここで写本の語がいくつか欠けている。

38～41章　復活祭の徹夜の祈りから五旬節の前まで

38:1 次の日の土曜日には、ならわしどおり第三時の務めが行われ、第六時の務めも行われます。しかし土曜日には、第九時の務めはもう行われず、大きな教会、つまりマルテュリウムで、復活祭の徹夜の祈りの準備がされます。復活祭の徹夜の祈りは、わたしたちのところと同じように行われます。ここで一つだけ多く行われるのは、次のことです。幼子たち[1]は、洗礼を受け、洗礼盤から上がって衣を着せられると、監督と一緒に、まずアナスタシスへ導かれるのです。38:2 監督はアナスタシスの仕切りの内に入り、賛歌が一つ唱えられます。そして監督が、その人たちのために祈ります。それから、その人たちと一緒に大きな教会へ来ます。そこでは、ならわしどおり民がみな夜を明かしています。そこで、わたしたちのところでもならわしになっていることが行われ、ささげ物がささげられると、散会となります。大きな教会で徹夜の祈りの散会が済むと、すぐに賛歌を唱えながらアナスタシスへ行きます。そこで再び、復活を語る福音書の箇所が読まれ、祈りをし、監督がそこで再びささげ物をささげます。しかし、民がこれ以上待たされないように、すべては手短に行われます。こうして、もう民は帰されます。この日の徹夜の祈りの散会は、わたしたちのところと同じ時刻に行われます。

39:1 夕方には、復活祭の日々が、わたしたちのところと同じように守られます。復活祭の八日間には、散会が定めの順序どおりに行われます。どこでも、復活祭から八日目まで、そうするのと同じです。飾りも、そのしつらえも、復活祭の八日間には、公現祭のときと同じです。大きな教会でも、アナスタシスでも、十字架の所でも、エレオナでも、さらにベツレヘムでも、ラザリウムでも、どこでもそうです。復活祭の日々だからです。39:2 復活祭の当日、最初の主の日には、大きな教会、つまりマルテュリウムへ行列して行きます。月曜日と火曜日もそうです。ただし、そのときもいつも、マルテュリウムで散会となった後に、賛歌を唱えながらアナスタシスへ行きます。水曜日にはエレオナへ、木曜日にはアナスタシスへ、金曜日にはシオンへ、土曜日には十字架の前へ行列して行きます。そして主の日、つまり八日目には、再び大きな教会、つまりマルテュリウムへ行列して行きます。39:3 この復活祭の八日間には毎日、昼の食事の後に、監督がエレオナに登ります。聖職者もみな一緒です。幼子たち、つまり洗礼を受けた人たちもみな、世を捨てた人たちも、男も女もみな一緒です。民のうちからも、望む人はだれでも登ります。賛歌が唱えられ、祈りをします。エレオナにある教会でそうします。イエスが弟子たちを教えておられたほら穴のある教会です。インボモン、つまり主が天にお昇りになった場所でも、そうします。39:4 詩篇が唱えられ、祈りをしたら、そこから、ともしびの祈りの時刻に、賛歌を唱えながらアナスタシスまで下りて来ます。これが八日間ずっと行われます。復活祭の主の日には、ともしびの祈りの散会、つまりアナスタシスでの散会が済みます。その後、民はみな賛歌を唱えながら、監督をシオンへ導いて行きます。39:5 シオンに着くと、その日とその場所にふさわしい賛歌が唱えられ、祈りをし、福音書の箇所が読まれます。いまシオンの教会が建つこの場所で、同じこの日に、戸が閉じられていたのに、主が弟子たちのところへお入りになった箇所です。つまり、そのとき弟子の一人、すなわちトマスがそこにいなかったときのことです。トマスが戻って来て、ほかの使徒たちが主を見たと言うと、トマスは『わたしは、見なければ、決して信じない』と言いました（ヨハネ二〇・二五）。これが読まれると、再び祈りをし、洗礼志願者たちが祝福を受け、次に信徒たちも祝福を受けます。そしてみなそれぞれ自分の家へ帰ります。晩遅く、夜の第二時ごろです。

40:1 また、復活祭の八日目、つまり主の日には、第六時の後すぐに、民はみな監督と一緒にエレオナに登ります。まず、そこにある教会でしばらく座ります。賛歌が唱えられ、その日とその場所にふさわしい交唱が唱えられ、祈りをします。祈りも同じように、その日とその場所にふさわしいものです。そこから再び、賛歌を唱えながら、上のインボモンへ登って行きます。そこでも、エレオナ

の教会と同じことが行われます。やがて時刻になると、民はみな、世を捨てた人たちもみな、賛歌を唱えながら監督をアナスタシスまで導きます。アナスタシスに着くのは、ともしびの祈りがいつも行われる時刻です。40:2 こうして、アナスタシスでも十字架の所でもともしびの祈りが行われます。そこから民は一人残らず、賛歌を唱えながら監督をシオンまで導きます。シオンに着くと、同じように、その場所とその日にふさわしい賛歌が唱えられます。そして再び福音書の箇所が読まれます。復活祭の八日目に、弟子たちのいた所に主がお入りになり、なぜ信じなかったのかと、トマスをお責めになった箇所です。このときは、その箇所が全部読み通されます。その後、祈りをし、ならわしどおり洗礼志願者も信徒も祝福を受けると、みなそれぞれ自分の家へ帰ります。復活祭の主の日と同じく、夜の第二時です。

41:1 復活祭から五十日目、つまり五旬節までは、ここではだれ一人断食しません。世を捨てた人たちでさえ断食しません。この日々も、一年じゅうと同じように、アナスタシスでは最初の鶏が鳴いてから朝まで、いつものことが行われます。第六時にも、ともしびの祈りにも、同じように行われます。主の日には、ならわしどおり、いつもマルテュリウム、つまり大きな教会へ行列して行きます。そこから賛歌を唱えながらアナスタシスへ行きます。水曜日と金曜日には、この日々はだれ一人断食しないので、シオンへ行列して行きます。ただし朝にです。散会は定めの順序どおりに行われます。

訳注

1 洗礼を受けたばかりの人たちを言う。

42〜44章　四十日目と五旬節

42:1 復活祭から四十日目、つまり木曜日には、その前日、つまり水曜日の第六時の後に、みながベツレヘムへ行きます。徹夜の祈りを守るためです。徹夜の祈りは、ベツレヘムの教会で行われます。主がお生まれになったほら穴のある教会です。次の日、つまり四十日目の木曜日には、務めが定めの順序どおりに祝われます。長老たちも監督も説教をし、その日とその場所にふさわしいことを語ります。その後、晩になると、みなそれぞれエルサレムへ帰ります。

43:1 五十日目、つまり主の日は、民にとっていちばん骨の折れる日です。この日には、すべてが次のように行われます。まず最初の鶏が鳴くと、ならわしどおり、アナスタシスで夜を明かします。監督が福音書の、いつも主の日に読まれる箇所、つまり主の復活の箇所を読むためです。その後、一年じゅうと同じく、いつものことがアナスタシスで行われます。43:2 朝になると、民はみな大きな教会、つまりマルテュリウムへ行列して行きます。そこでも、いつも行うならわしのことがすべて行われます。長老たちが説教をし、その後に監督も説教をします。定めのことがすべて行われます。つまり、主の日にいつもするように、ならわしどおりささげ物がささげられます。ただし、マルテュリウムでの散会は、第三時の前に済むように早められます。マルテュリウムで散会となると、民はみな一人残らず、賛歌を唱えながら監督をシオンへ導いて行くからです。それも、第三時ちょうどにはシオンにいるようにするためです。43:3 シオンに着くと、使徒行伝の箇所が読まれます。御霊が下って、すべての国語が聞こえ、みなが語られることを悟った箇所です（使徒二・四）。その後、定めの順序どおりに務めが行われます。長老たちは、いま読まれたこのことについて、そこで使徒行伝から読みます。ここがシオンのその場所だからです。今は別の教会になっていますが、かつて主の受難の後に、群衆が使徒たちと一緒に集まっていた所です。先にわたしたちが述べたとおり、そのときにこのことが起こったのです。その後、定めの順序どおりに務めが行われ、そこでもささげ物がささげられます。民が帰されるときには、執事長が声を上げて告げます。「今日は第六時の後すぐに、みなでエレオナの、インボモンに集まっていましょう」。43:4 そこで民はみな、それぞれ家に帰って休みます。そして昼の食事の後すぐに、みなそれぞれできるやり方でオリブ山、つまりエレオナに登ります。町に残るキリスト者は一人もいません。みなが行くのです。43:5 オリブ山、つまりエレオナに登り着くと、まずインボモン、つまり主が天にお昇りになった場所へ行きます。そこで監督と長老たちが座り、民もみな座ります。そこで聖書の箇所が読まれ、あいだに賛歌が唱えられ、その日とその場所にふさわしい交唱も唱えられます。あいだにはさまれる祈りも、いつもその日とその場所にふさわしい言葉で唱えられます。福音書の、主の昇天を語る箇所も読まれます。さらに、使徒行伝からも再び、主が復活の後に天にお昇りになったことを語る箇所が読まれます。43:6 これが済むと、まず洗礼志願者たちが、次に信徒たちが祝福されます。そして、もう第九時になると、そこから下り、賛歌を唱えながら、同じエレオナにあるあの教会へ行きます。主が座って使徒たちを教えておられたほら穴のある教会です。そこに着くと、もう第十時を過ぎています。そこでともしびの祈りが行われ、祈りをし、まず洗礼志願者たちが、次に信徒たちが祝福されます。それから、そこを賛歌を唱えながら下ります。民はみな一人残らず、監督と一緒に、その日にふさわしい賛歌と交唱を唱えます。こうして、ゆっくり、ゆっくりマルテュリウムまで来ます。43:7 町の門に着くと、もう夜になっています。民のために、教会のともしびが二百ほど迎えに出ます。門から大きな教会、つまりマルテュリウムまでは、かなりの道のりがあるので、着くのは夜の第二時ごろになります。民の足が疲れないように、道のりのあいだずっと、ゆっくり、ゆっくり進むからです。市場に面した側の大きな扉が開かれ、民はみな賛歌を唱えながら、監督と一緒にマルテュリウムに入ります。教会に入ると、賛歌が唱えられ、祈りをし、まず洗礼志願者たちが、次に信徒たちが祝福されます。そこから再び、賛歌を唱えながらアナスタシスへ行き

ます。43:8 アナスタシスに着くと、同じように賛歌と交唱が唱えられ、祈りをし、まず洗礼志願者たちが、次に信徒たちが祝福されます。十字架の所でも同じように行われます。そこから再び、キリスト者の民はみな一人残らず、賛歌を唱えながら監督をシオンまで導いて行きます。43:9 シオンに着くと、ふさわしい聖書の箇所が読まれ、詩篇と交唱が唱えられ、祈りをします。そして、まず洗礼志願者たちが、次に信徒たちが祝福されて、散会となります。散会となると、みなが監督の手のもとに進み出ます。そしてみなそれぞれ自分の家へ帰ります。夜中ごろです。こうして、この日には、いちばん大きな労苦に耐えることになります。最初の鶏が鳴いてからアナスタシスで夜を明かし、そこから一日じゅう休みなく続くからです。こうして、祝われることはみな長く延びて、シオンでの散会の後、夜中にみなが自分の家に帰るのです。

44:1 五十日目の次の日からは、一年じゅうと同じく、ならわしどおり、みながそれぞれできるだけ断食します。ただし土曜日と主の日は除きます。この土地では、この二つの日には決して断食しないからです。その後のほかの日々にも、一つ一つが一年じゅうと同じように行われます。つまり、いつも最初の鶏が鳴くと、アナスタシスで夜を明かします。44:2 主の日なら、まず最初の鶏が鳴くと、ならわしどおり、監督がアナスタシスの中で福音書を読みます。いつも主の日に読まれる、主の復活の箇所です。その後、夜が明けるまで、アナスタシスで賛歌と交唱が唱えられます。主の日でなければ、同じように最初の鶏が鳴いてから夜が明けるまで、アナスタシスで賛歌と交唱が唱えられるだけです。44:3 世を捨てた人たちはみな行きます。民のうちでは、行ける人が行けるように行きます。聖職者たちは毎日交代で行きます。聖職者たちは最初の鶏が鳴くと、監督はいつも空が白むころに行きます。朝の散会を聖職者みなと一緒に行うためです。ただし主の日は別です。監督は最初の鶏が鳴くと行って、アナスタシスで福音書を読まなければならないからです。再び第六時には、いつものことがアナスタシスで行われます。第九時にも、ともしびの祈りにも同じように、一年じゅう行われているならわしどおりに行われます。水曜日と金曜日には、ならわしどおり、いつも第九時の務めがシオンで行われます。

45〜49章　洗礼志願者の教えと献堂の祭り

45:1 また、復活祭に洗礼を受ける人たちがどのように教えられるかも、書いておかなければなりません。名を出す人は、四旬節の最初の日の前に名を出し、長老がみなの名を書き留めます。つまり、先に言ったように、ここで四旬節として守る八週の前です。45:2 長老がみなの名を書き留めると、その次の日、つまり四旬節の八週が始まる日には、次のようにします。大きな教会、つまりマルテュリウムの中ほどに、監督の座が置かれます。長老たちが両側の座に座り、聖職者たちはみな立っています。そして、洗礼を願い出た人が一人ずつ連れて来られます。男なら父と一緒に来ます。女なら母と一緒です。45:3 そして監督は、入って来た人の隣人たちに、一つ一つ尋ねます。「この人は良い暮らしをしていますか。親を敬っていますか。酒飲みや、軽薄な者ではありませんか」。こうして、人の悪徳のうちでもとくに重いものを、一つずつ尋ねます。45:4 監督が、居合わせた証人たちの前で尋ね、そのすべてについてとがめられるところがないと確かめたとします。すると監督は、自分の手でその人の名を書き留めます。しかし、その人が何かで訴えられると、監督は外に出るように命じて言います。「この人は行いを改めるように。改めたら、そのときに洗いを受けに来るように」。男についても女についても、このように尋ねて言います。よそから来た人は、その人を知っている人たちの証言がなければ、そう簡単には洗礼に進めません。

46:1 姉妹の皆さま、これが理由もなく行われていると皆さまが思わないように、書いておかなければなりませんでした。というのも、ここのならわしは次のとおりなのです。断食をする四十日のあいだ、洗礼に進む人たちは、まず朝早く、聖職者たちから悪霊を退ける祈りを受けます。アナスタシスでの朝の散会が済むとすぐです。そしてすぐに、大きな教会のマルテュリウムに監督の座が置かれます。洗礼を受ける人たちはみな、男も女も、監督の近くにまわりを囲んで座ります。父や母もその場に立っています。民のうちで聞きたい人たちも、みな入って座ります。ただし、信徒だけです。46:2 洗礼志願者は、監督が彼らに教えを授けるときには、そこに入りません。教え方は次のとおりです。監督は創世記から始めて、その四十日のあいだに聖書全体をたどります。まず字義どおりに説き明かし、次にそれを霊的に解き明かすのです。復活についても、同じく信仰についても、その日々のあいだにすべてが教えられます。これを「教話」と呼びます。46:3 そして、教えを受け始めてから五週が過ぎると、そのとき信条を授けられます。監督は、すべての聖書の意味を説き明かすのと同じように、信条の意味も彼らに説き明かします。言葉の一つ一つを、まず字義どおりに、次に霊的に説き明かすのです。こうして信条も説き明かします。そのため、この土地では、教会で聖書が読まれるとき、信徒はみなその意味をたどることができます。みな四十日のあいだ、つまり第一時から第三時まで教えられるからです。教話は三時間にわたって行われるのです。46:4 姉妹の皆さま、神がご存じです。教話に聞きに入る信徒たちは、監督が語り、説き明かすことに、大きな声を上げます。監督が教会で座って説教をし、このように説き明かされる一つ一つに上げる声よりも、大きいのです。もう第三時になって教話の散会が済むと、すぐにそこから、監督が賛歌とともにアナスタシスへ導かれ、第三時の散会となります。こうして七週のあいだ、一日に三時間ずつ教えられます。四旬節の第八週、つまり「大いなる週」と呼ばれる週には、もう彼らを教える暇がないからです。先に述べたことが行われるためです。46:5 七週が過ぎて、復活祭前のあの一週だけが残ります。ここで「大いなる週」と呼ぶ週です。そのとき監督は朝、大きな教会のマルテュリウムに来ます。後陣の、祭壇の後ろに、監督の座が置かれます。そこへ一人ずつ、男は父と一緒に、女は母と一緒に進み出て、監督の前で信条を唱えて返します。46:6 信条を唱えて返し終えると、監督はみなに語りかけて言います。「あなたがたはこの七週のあいだ、聖書の教えをすべて教えられ、信仰についても聞きました。肉の復活についても聞き、信条の意味もすべて聞きました。ただし、まだ洗礼志願者として聞けるかぎりのことです。しかし、もっと高い秘義の言葉、

つまり洗礼そのものの言葉は、まだ洗礼志願者なので、聞くことができません。神の名によって洗礼を受けたら、復活祭の八日間、教会での散会の後に、アナスタシスで聞くことになります。何事も理由なく行われていると思わないようにするためです。まだ洗礼志願者なので、神のさらに奥深い秘義を、あなたがたに語ることはできないのです」。

47:1 復活祭の日々が来ると、その八日間、つまり復活祭から八日目までは、次のようにします。教会で散会となり、賛歌を唱えながらアナスタシスへ行くと、すぐに祈りをし、信徒たちが祝福されます。そして監督は、アナスタシスのほら穴にある内側の仕切りに寄りかかって立ち、洗礼で行われることをすべて説き明かします。47:2 その時刻には、洗礼志願者はだれもアナスタシスに近づかないからです。洗礼を受けたばかりの人たちと、秘義を聞きたい信徒たちだけが、アナスタシスに入ります。洗礼志願者がだれも来ないように、戸は閉じられます。監督が一つ一つを論じて語るあいだ、たたえる人たちの声はとても大きく、教会の外の遠くまで聞こえるほどです。まことに監督は、すべての秘義を解き明かします。そのように説き明かされるのを聞いて、心を動かされずにいられる人がだれもいないほどです。47:3 この地方では、民のうちには、ギリシア語もアラム語もわかる人たちがいます。ほかに、ギリシア語だけがわかる人たちもいれば、アラム語だけがわかる人たちもいます。監督は、アラム語を知っていても、いつもギリシア語で話し、決してアラム語では話しません。そこで、いつも長老が一人立っていて、監督がギリシア語で話すと、アラム語に訳します。説き明かされることを、みなが聞けるようにするためです。47:4 教会で読まれる聖書の箇所も、ギリシア語で読まなければならないので、民のために、いつもアラム語に訳す人が立っています。いつも学べるようにするためです。ここにいるラテン語を話す人たち、つまりアラム語もギリシア語もわからない人たちにも、説き明かされます。みな悲しまずに済むようにするためです。ギリシア語とラテン語のできる兄弟姉妹たちがいて、ラテン語で説き明かしてくれるからです。47:5 ここで何よりも喜ばしく、何よりも感嘆させられるのは、次のことです。賛歌も交唱も、聖書の箇所も、監督が唱える祈りも、いつもふさわしく合った言葉で唱えられるのです。祝われるその日にも、行われるその場所にも合っています。

48:1 また、「献堂の祭りの日々」と呼ばれる日があります。ゴルゴタにある聖なる教会、マルテュリウムと呼ばれる教会が、神にささげられた日です。また、アナスタシスにある聖なる教会、つまり主が受難の後に復活なさった場所の教会も、同じ日に神にささげられました。こうして、この二つの聖なる教会の献堂の祭りは、この上ない誉れをもって祝われます。主の十字架がその同じ日に見つかったからです。48:2 そのため、上に記した聖なる教会が初めて神にささげられたとき、それが主の十字架の見つかった日になるように定められたのです。両方が同じ日に、あらゆる喜びのうちにともに祝われるためです。また、聖なるソロモンが神の宮を建て終えて、神の祭壇の前に立って祈ったのも、献堂の祭りの日でした。このことも聖書に見いだされます。歴代志に書かれているとおりです（歴代下七・八）。

49:1 この献堂の祭りの日々が来ると、八日間にわたって守られます。その何日も前から、修道士や世を捨てた人たちの群衆が、あちこちから集まり始めるのです。さまざまな州、つまりメソポタミヤやスリヤ、また修道士たちの多いエジプトやテーバイスから来るだけではありません。ほかのあらゆる場所や州からも来ます。これほど大きな喜びと、これほど尊い日々のために、その日にエルサレムへ向かわない人は、一人もいないからです。一般の人たちも、男も女も、聖なる日のために信仰の心をもって、同じようにあらゆる州から、その日々にエルサレムに集まります。49:2 監督たちは、少ないときでも、その日々のエルサレムには四十人か五十人を超えます。監督たちと一緒に、それぞれの聖職者たちも大勢来ます。ほかに何を言いましょうか。その日々にこれほどの祭りに居合わせなかった人は、とても大きな罪を犯したと思うのです。ただし、人をよい志から引き止めるような、やむを得ない事情がなければのことです。49:3 この献堂の祭りの日々には、すべての教会の飾りは、復活祭と公現祭のときと同じです。日ごとにさまざまな聖なる場所へ行列して行くことも、復活祭と公現祭のときと同じです。一日目と二日目には、マルテュリウムと呼ばれる大きな教会へ行列して行きます。三日目にはエレオナ、つまり、主が受難の後に天にお昇りになったその山の上の教会へ行きます。その教会の中には、主がオリブ山で使徒たちを教えておられたあのほら穴があります。四日目には[1]

訳注

1 写本はここで途切れ、終わりの部分が失われている。

巡礼記

2026年11月23日 版
著者　エゲリア
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/egeria-pilgrimage/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/egeria-pilgrimage
全文を、ラテン語原文（Peregrinatio ad loca sancta）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。